

白石市
大 畑 遺 跡 I

—都市計画道路「白石沖・中河原線」関連遺跡—
発掘調査報告書 I

2017 年 3 月

白石市教育委員会

白石市

大 畑 遺 跡 I

—都市計画道路「白石沖・中河原線」関連遺跡—

発掘調査報告書 I

例　　言

- 本書は、白石市字大畑・東大畑・寺屋敷前・郡山に所在する大畑遺跡の発掘調査報告書である。
- 大畑遺跡の発掘調査は平成12年度に白石市教育委員会が都市計画道路「白石沖・中河原線」建設にかかる調査として実施したものである。
- 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1996)に準拠している。
- 本書の「周辺の遺跡」は国土地理院発行1/25,000地形図「白石」「白石東部」「白石東南部」「大河原」を複製して使用した。
- 本書の作成は、編集は白石市教育委員会生涯学習課文化財係・日下和寿、本文執筆は臨時職員・小川淳一(白石市文化財保護委員)が担当した。遺物写真撮影は日下・小川、遺物実測は小川、トレースは岡部とき子、図版作成は小川、岡部が行った。
- 発掘調査の記録、整理に関わる資料、出土遺物の全ては白石市教育委員会が保管している。
- 本書の作成に際し、次の方々と機関からご指導・ご助言・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

鈴木 雅（蔵王町教育委員会）荒井優作（丸森町教育委員会）早坂正寿（大高山神社宮司）
及川義行（大河原町文化財保護委員）川又隆央（岩沼市教育委員会）相原淳一・古川一明
(東北歴史博物館) 田中則和(東北学院大学東北文化研究所) 井沼千秋(桑折町まちづくり推進課)
柴田俊彰(福島市史編纂室) 菅野崇之(福島市振興公社文化財調査室)
及川真紀(奥州市教育委員会) 八重樋忠郎(平泉町まちづくり推進課)
井上雅孝(滝沢市埋蔵文化財センター) 羽柴直人(岩手県立博物館)
八木光則(岩手大学平泉文化研究センター) 山川 均(大和郡山市教育委員会)
佐藤亜聖(元興寺文化財研究所) 入間田宣夫(一関市博物館) 櫻井和人(白石市図書館)
石本 弘(伊達市教育委員会・白石市文化財保護委員) 宮城県考古学会中世考古学部会

目　　次

例言

I	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査要項	1
3.	調査の概要	1
II	遺跡の位置と環境	2
1.	遺跡の位置と地理的環境	2
2.	遺跡の歴史的環境	2
3.	遺跡周辺の地名	6
III	発見された遺構と遺物	8
1.	第1焼土遺構	8
2.	第1焼土遺構出土の遺物	9
IV	遺構と遺物の検討	15
1.	第1焼土遺構	15
2.	第1焼土遺構出土の遺物	16
V	古代末から中世前期の刈田郡とその周辺	22
VI	まとめ	36
	報告書抄録	

I は じ め に

1. 調査に至る経過

都市計画道路「白石沖・中河原線」の道路予定地内には、周知の遺跡として北から大畠遺跡・本郷遺跡・銚子ヶ盛古墳（鷹巣41号墳）の3遺跡が確認されていた。白石市教育委員会では道路工事に先立ち、路線敷内の分布調査と試掘調査を実施し、大畠遺跡と銚子ヶ盛古墳の2遺跡について記録保存を前提とする発掘調査を実施することとした。

都市計画道路「白石沖・中河原線」に関わる大畠遺跡の発掘調査は、国道113号線の南側を平成12年度、北側を平成13～14年度に実施した。発掘調査は遺跡の南部から始め、北へと進めた。本報告の調査区は大畠遺跡の最南端である。

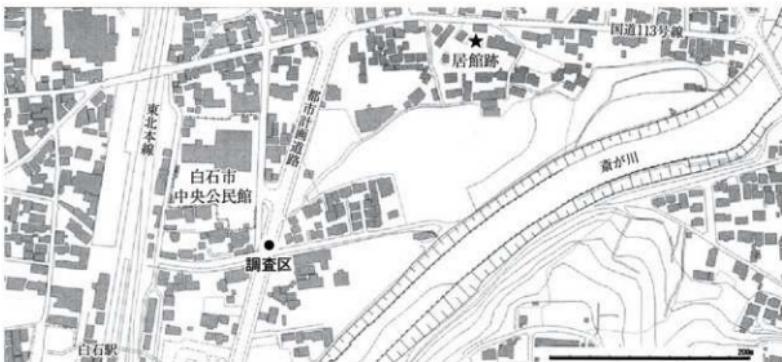
2. 調査要項

- (1) 遺 跡 名：大畠遺跡（宮城県登録番号 02262）
- (2) 所 在 地：白石市字大畠一番・字大畠二番・字東大畠・字寺屋敷前・字堂場前・郡山
　　本報告調査区：字堂場前73番地
- (3) 調 査 目 的：都市計画道路「白石沖・中河原線」建設に伴う事前調査
- (4) 調 査 主 体：白石市教育委員会
- (5) 調 査 担 当：白石市教育委員会社会教育課文化財係
- (6) 調査担当職員：清野俊太郎（社会教育課文化財係）
- (7) 調 査 指 導：宮城県教育庁文化財保護課・中橋彰吾（白石市文化財保護委員長）
- (8) 調 査 期 間：平成12年4月25日～26日
- (9) 調 査 面 積：調査区平面図などの記録が残っていないため調査面積は不明

3. 調査の概要

平成12年、17年前の発掘調査である。遺憾ながら、当時の調査記録は散逸してしまっている。残っているものは「第1焼土遺構」と名付けられた遺構の位置図・平面図・断面図・スナップ写真と出土遺物である。出土遺物は手づくねかわらけである。手づくねかわらけは浅い遺物収納箱1箱分である。

調査区設定・調査経過・基本層序などについては詳細不明であるが、遺構位置図が残っており、遺構の発見場所はわかる。それによると、遺構は白石市中央公民館の南東約50m、現在の「白石市消防団白石分団12班積載車庫」前の都市計画道路の真ん中あたりで発見されたことになる（第1図）。



第1図 調査区の位置

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

大畠遺跡は陸奥国刈田郡家擬定地である。遺跡は白石市字大畠一番・大畠二番・東大畠・郡山ほかに所在する。東北本線白石駅のすぐ北に位置し、広さは約 62ha である。今回報告する調査地点は大畠遺跡の南端にある。白石駅の北東約 200m、白石市中央公民館の南東約 50m の地点である。

大畠遺跡のある白石市は蔵王連峰の南東麓にある。宮城県内陸部の最南端に位置しており、福島県と接し、山形県と接している。市域中央部は西を奥羽山脈、東を阿武隈山地に挟まれた南北に長い低地となっており、白石盆地とも呼ばれている。宮城県と福島県の県境は奥羽山脈と阿武隈山地が接する急峻な峰で、白石盆地と福島県中通り地方最北端の福島盆地（信達盆地）を結ぶ狭隘部となっている。ここに、文治 5（1189）年の奥州合戦最大の激戦地となった阿津賀志山がある。大畠遺跡から阿津賀志山の麓までは約 15km である。

白石盆地北部では阿武隈川支流の白石川が東流し、盆地東部では白石川支流の斎川（地元では「斎が川」と呼んでおり、以下、「斎が川」とする）が北流している。白石川と斎が川は大畠遺跡の北東で合流している。白石駅の東側では阿武隈山地から西に伸びた低丘陵が突出しており、これより北の斎が川下流は西に東にと大きく蛇行している。大畠遺跡はこの東に大きく蛇行した斎が川下流域左岸の自然堤防上に立地している。近年の調査では、遺跡の西部で南北の、南部で東西の河川跡が確認されている。遺跡内で最も地盤が安定し、微高地となっている部分には南北に東北本線が通っている。線路東側の微高地上から、正倉跡とされる縦柱建物跡が発見されている。

遺跡の北方には神体山の青麻山（大刈田岳）が、北西には古今和歌集・枕草子にも登場する蔵王連峰の不忘山がそびえている。現在、白石盆地を国道 4 号線・東北自動車道・東北本線・東北新幹線が通り、これに太平洋側の相馬市と日本海側の新潟市を結ぶ国道 113 号線が交差している。国道 4 号線・東北自動車道は遺跡の西方、国道 113 号線は遺跡の南部を通っている。

2. 遺跡の歴史的環境（第2図）

大畠遺跡のある白石盆地北東部を中心に、古代前後の考古資料を中心に概観する。

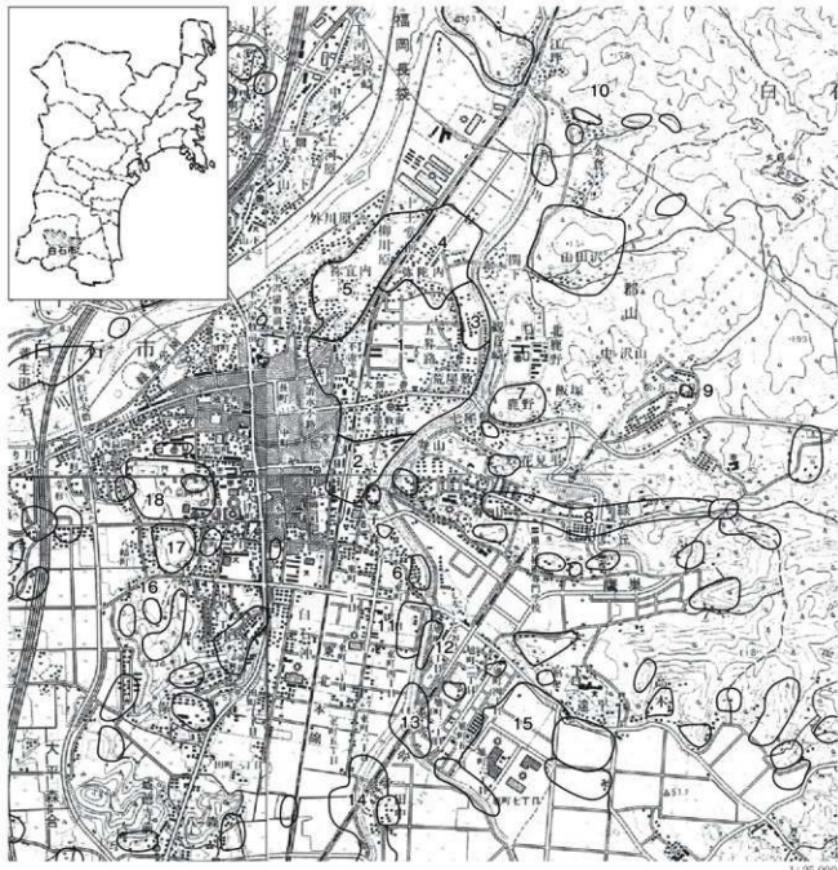
〔6～7世紀〕

斎が川東側の阿武隈山地には古墳・横穴墓がある。鷹巣 20 号墳（首長墓：古墳時代後期後半・前方後円墳）、後期後半から終末期の群集墳（円墳群）、上蟹沢古墳（首長墓：終末期円墳、凝灰岩切石積複室構造の横穴式石室、裝飾付大刀：象嵌主頭柄頭・鍔、金属製壺鏡）、郡山横穴古墳群（終末期横穴墓）などがある（古川：2013）。斎が川西岸の自然堤防上には南から北無双作遺跡、本郷遺跡、大畠遺跡、觀音崎遺跡の 4 集落跡がある。4 集落跡は南北約 1.5km にわたり、蛇行する斎が川に沿って連続している。古墳時代後期後半から古代にかけての拠点的大集落である。大畠遺跡では 7 世紀後半と推定される堅穴建物跡から関東系土師器杯の出土が報じられている（日下・佐藤：2008）。これまでの調査で出土している遺物を再点検すると、大畠遺跡・本郷遺跡・觀音崎遺跡では関東地方や東北地方北部の土師器に類似したものが確認される。

〔8～10世紀〕

大畠遺跡の「東大畠」地内からは縦柱建物跡 3 棟と礎石建物跡 3 棟が発見されている。この縦柱建物跡群は、養老 5（721）年に建都された陸奥国刈田郡家の正倉跡と推定されている（近藤：1991 清野：1991 八嶋：1995）。本遺跡南隣の本郷遺跡からも巨大な縦柱建物跡の柱穴が発見されており、刈田郡家の範囲が本郷遺跡まで広がる可能性を考えられている（日下：2017）。大畠遺跡・本郷遺跡のある白石盆地北東部が陸奥国刈田郡の中心であった。

刈田郡の北東隣が柴田郡、東隣が伊具郡、南隣が伊達郡・信夫郡、西隣が出羽国（旧陸奥国）置賜郡（山形県）である。柴田郡の西隣が出羽国（旧陸奥国）最上郡である。刈田郡は東西南北をつなぐ交通上



番号	道路名	種別	時代	番号	道路名	種別	時代
1	大烟遺跡	官衙 集落	弥生 古代 中世	10	郡山横穴墓群	横穴墓	古墳後 ~ 終末
2	本郷道路	官衙 集落	弥生 古代 中世	11	白石沖遺跡	散布地	古墳後 古代
3	觀音崎道路	集落	弥生 古代	12	梅田遺跡	集落	弥生 古墳前 中世
4	弥陀内道路	散布地	弥生 古代	13	谷津川遺跡	散布地	弥生 古代 中世
5	桜宜内道路	集落	古代	14	田中遺跡	散布地	弥生 古代 中世
6	北無双作道路	集落	古墳後 古代	15	白石条里刺耕推定地	水田跡	古代 中世
7	鹿島山道路	集落	古代 中世	16	八幡坂窯跡	須恵器窯跡	奈良 平安
8	鷹巣古墳群	円墳 前方後円墳	古墳中 ~ 終末	17	兀山窯跡	瓦窯跡	奈良
9	上蟹沢古墳	円墳	古墳終末(飛鳥)	18	白石城跡	城館	中世 近世

第2図 大烟遺跡と周辺の遺跡

の要衝の地に建てられている。「延喜式」には、刈田郡周辺の東山道の駅家は、南から「…伊達・篤僧・柴田・小野」、伝馬常備の郡は「…信夫・刈田・柴田」とある。東山道の駅家の配列は出羽国最上郡に至る釜谷峠越えの出羽道を示している。柴田郡から分けて刈田郡を建郡したのは、和銅5(712)年の出羽国の建置と陸奥国の最上・置賜二郡の出羽国への移管に伴う連絡路（東山道・出羽道）の整備であるとされてきた（小川：1994）。

近年、養老4(720)年の陸奥国の蝦夷の反乱後、陸奥国の支配体制再構築のための諸策の1つとして、出羽国の所属を北陸道から東山道へと替え、それを契機として陸奥国と出羽国を結ぶ駅家を設置した可能性が指摘されている。その実施時期を刈田建郡の年である養老5年後半頃としている（水田：2015・吉野：2016）。刈田建郡は多賀城造営・新鎮守府体制構築・黒川以北十郡・玉造等五郷の設置などの新たな蝦夷支配強化のための政策と一体化したものであったと推定される。大畠遺跡周辺からは奈良時代前半の関東地方の土師器杯に類似したものが確認されており、刈田建郡・東山道整備・駅家設置に際して関東地方の人々が関与していた可能性も考えられる。

本遺跡西方の独立丘陵には奈良・平安時代の須恵器窯である八幡坂窯跡（菅原・日下ほか：2009）、仙台郡山遺跡II期官衙段階の瓦窯で上野國山王庵寺系複弁八葉蓮華文軒丸瓦を出土している兀山瓦窯跡（佐々木・菊地：1985・佐川：2015）などの窯跡があり、製品は盆地東部から阿武隈山地西端の墳墓・集落・郡家に供給されたものと考えられている。珍しい遺物としては、大畠遺跡南東にある白石条里制跡推定地遺跡から奈良三彩陶枕の破片（日下ほか：2009）、大畠遺跡東隣の観音崎遺跡からは縁釉陶器椀・黒色土器B（無高台椀・椀・壺）、大戸窓長頭瓶が一括で出土している（中橋・清野：1978）。

〔11世紀〕

大畠遺跡の周辺では正倉跡から10世紀中頃の土器がまとまって出土しているが、11世紀の土器は出土していない。ただ、本遺跡の北方約4kmにある白石市福岡深谷の植田前遺跡から県内でも希な11世紀前半頃とされる土器が出土している（加藤：1981・柳沢：1994・村田：1995・井上：1996・1997）。

11世紀の東北地方は武士が主役となった戦乱の時代であった。前九年合戦（1051～62年）で滅ぼされた安倍頼時の娘婿に、伊具十郎平永衛と亘理權大夫藤原經清（藤原清衡の父）がいる。伊具は阿武隈川下流にある郡、亘理は阿武隈川河口の濱のある郡であり、二人は郡司として阿武隈川・太平洋の河川交通・海上交通を掌握していたものと考えられる。両者とも受領の郎等・従者として下ってきた武士で、土地の豪族の娘を娶り、地方に土着した者とされている（大石：1999）。亘理町逢隈「下郡」にある亘理郡家跡・三十三間堂遺跡の第V期以降の建物跡が藤原經清時代の施設と推定されている（村田・千葉・鈴木：2016）。

文治五年奥州合戦で鎌倉方として大活躍する白石市大鷹沢三沢の「三澤安藤氏」は安藤氏の一族であり、安倍氏を祖としている。このことから推測すると、安倍氏一族が掌握していた亘理・伊具両郡とはほぼ同時期に、隣接する内陸部の刈田郡にも安倍氏の同族が入って来た可能性がある。刈田郡にも安倍氏や前九年合戦にまつわる多くの伝承が残っている。

植田前遺跡のある白石市福岡深谷は神体山・青麻山の南東麓にあり、遺跡の北北西約5.5kmに青麻山、遺跡の西北西約14kmに不忘山がある。「刈田郡誌」は植田前遺跡周辺の寺社として、遺跡の東北東約700mの「字白山堂」には白山権現堂、北方約500mの「字諱堂（旧字阿弥陀堂）」には慈覚大師作とされる阿弥陀如来像がある禮讚寺（淨土真宗）、北北西約600mの「字五輪坂」には天台寺院があったと伝える。東北東約2.5km・青麻山東麓の藏王町宮には式内社・刈田嶺神社（別号・白鳥大明神）があり、東北東約500mの「字明神」には白鳥神社（地元では藏王権現と呼称）がある。刈田嶺神社の近くには、藏王権現を祀る修驗道の寺・願行寺があったとされる。これらの寺社の存在から、時期は特定できないが、植田前遺跡周辺には天台宗・白山権現・藏王権現・白鳥信仰などが混交した神仏習合思想が広がっていたものと推定される。

『藏王町史 通史編』『藏王信仰史』（小紫：1994）では、刈田嶺神社・願行寺は平泉藤原氏以前には安倍氏の庇護を受けていたとしている。また、岩手県紫波郡紫波町にある赤沢白山神社は永承2(1047)年に藤原經清により勧請されたとの伝承があり、白山権現は安倍氏とも関係が深いようだ。刈田嶺神

社に近く、白鳥神社（蔵王権現）・白山権現堂がある植田前遺跡周辺の地域も安倍氏の影響下にあった可能性が強い。『蔵王町史 通史編』「白鳥伝説のなぞ」（平川：1994）では、刈田・柴田郡の白鳥三社（刈田嶺神社・大高山神社・村田の白鳥神社）は安倍則任（安倍貞親の弟・白鳥八郎則任）を祭神とする伝承をもっていること、白鳥八郎則任の本拠地である胆沢郡白鳥村の白鳥神社は刈田嶺神社の本社であるとする伝承があることを紹介している。白鳥三社の祭神や本社にまつわる伝承の成立はこの地の人々に「非業の最期をとげた安倍氏に対する一定の共感があったから」としている。「共感」のベースには安倍氏がこの地域の在地領主と直接的に結び付いて深く関与していた史実があったからではないかと推測する。在地領主は安倍氏の同族である「三澤安藤氏」祖先の可能性がある。

植田前遺跡は北東流する白石川北岸の低位河岸段丘の南向き緩斜面に立地している。遺跡の南は段丘崖、東と西は沢によって区画され、舌状になっている。この段丘崖と沢による区画は島海柵跡など奥六郡の安倍氏の柵・居館に類似している。遺跡の北には禮讚寺、東北東には白鳥神社・白山権現堂・刈田嶺神社などの宗教施設がある。遺跡北方の禮讚寺後方に青麻山を仰ぎ、西北西はるかに不忘山を望むことができる。発掘調査では等高線に平行あるいは直交する浅く長い溝が発見されており、区画溝かと推定されるが、建物跡は未確認である。この時期には宴会儀礼や宗教儀礼にだけ使用するものとされる土器が溝から一定量出土していることから、遺跡はこの地域の有力者の居館と推定される。南側の段丘崖下には東山道が通っていたものと推定され、遺跡の位置と立地は当時の幹線道路とも関係があるものと考えられる。

刈田嶺神社に近く、白鳥神社もあるこの地域は刈田嶺神社の神領・願行寺の寺領であった可能性がある。安倍氏は在地領主と婚姻関係を結ぶなどして刈田嶺神社の祭祀権を掌握し、この地域の開発を主導したかもしれない。開発は在地領主の監督の下、天台聖や日吉・白山神人らが先導し、神仏で結び付いた村人も参加したのであろう。段丘崖下の冲積地に水田、段丘上に畠と、新たに耕地が拓かれたものと考えられるが、蔵王連峰裾野のこの地域は黒ボク土壤が発達し、決して農耕に適した土地ではない。ただ、黒ボク土壤には馬の好きなススキや笹が繁茂する。深谷地区の低丘陵から段丘の緩斜面は馬の放牧には適しており、馬産の地だった可能性も考えられる（第3図）。



第3図 植田前遺跡周辺の寺社

〔12世紀〕

平泉藤原氏の時代の遺構・遺物はこれまで不明であったが、近年、斎が川下流域の大畠遺跡で確認されている。本報告地点の北東約300mの「堂場前」地内で、溝から福島市飯坂窯跡群の製品と推定される須恵器系陶器壺、产地不明の三筋文壺、青磁、白磁などの破片が出土している（日下・佐藤：2008）。平泉藤原氏の時代の居館があった可能性が考えられる。この北東の「郡山字荒屋敷」には白山社がある。大畠遺跡北隣の弥陀内遺跡からは渥美甕の破片（日下・佐藤：2008）が出土している。

大畠遺跡の南方、斎が川中流域の梅田遺跡からも常滑三筋文壺の破片（日下ほか：2011）が出土している。この地域の自然堤防上には梅田遺跡・谷津川遺跡・田中遺跡と中世の遺跡が連続しており、平泉藤原氏の時代、「大鷹沢三沢」の地にも12世紀の居館が存在した可能性がある。

『白石市史通史篇』には、白石盆地西部の山麓に福岡藏本流下経塚・森合鷲山経塚・明神塚・十三塚などが集中している地域があるとしている（片倉・中橋・後藤：1976　亘理・中橋：1979）。現在、経塚の所在は不明であるが、経塚などが盆地西部の山麓、大畠遺跡から見て西の方に集中しているということは気になる指摘である。この場所は白石城の西方でもあり、愛宕山の東麓には白石城主片倉家御廟もある。白石城跡の発掘調査では中世の板碑も出土しており（中橋・日下：1998）、白石城のある独立丘陵も含め、白石盆地西部の山麓一帯は古くからの信仰の地であった可能性がある。

経塚があったとされている西山の地域は白石盆地と奥羽山脈の境にあたる。ここを国道113号線が通っており、山中を西に進み二井宿跡を越えると山形県東置賜郡高畠町に至る。大畠遺跡から西方を見ると、国道が通るV字状の山の端とその後方に高くそびえる花房山が印象的である。

〔13～14世紀〕

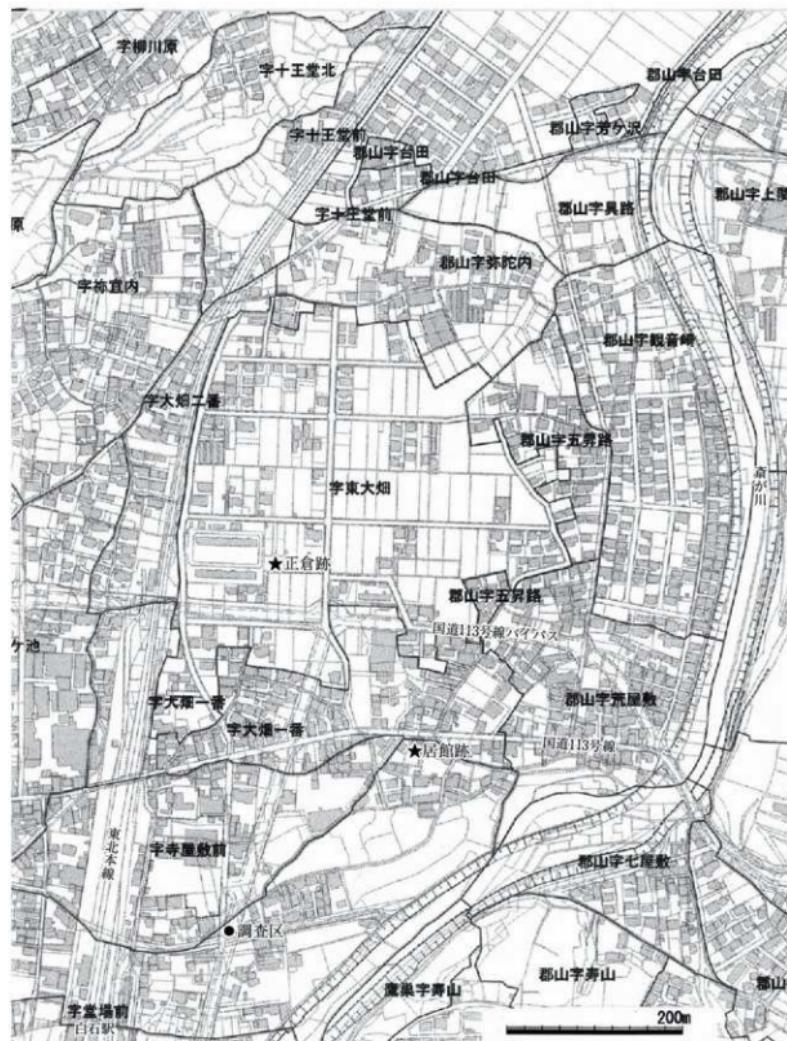
鎌倉時代の遺跡の調査は少なく、前半期はよく分からぬ。後半期も遺構は不明であるが、盆地東部で白石産中世陶器がよく出土する。白石産中世陶器は本遺跡の東方約4km、阿武隈山中の白石市白川大卒都婆にある白石窯跡群（一本杉・東北・市の沢・黒森の4支群）で生産された瓷器系中世陶器である（片倉・中橋・後藤：1976）。一本杉窯跡群では20基の窯跡が調査されており、出土陶器は鎌倉時代後半期（13世紀中葉～14世紀前葉）のものとされている（菊地・早川：1996）。

鎌倉時代後半期の刈田郡は北条氏得宗領であり、白石窯の陶器の生産と流通には北条氏の関与が考えられている（岡田：1994　小川・高橋：2000）。白石窯跡群に近く、白石産中世陶器の出土が顕著な盆地東部に、北条氏の郡政所屋敷などの政治的中心施設があった可能性がある。斎が川下流域の大畠・本郷遺跡周辺、斎が川中流域にある谷津川・田中遺跡周辺がその候補地として挙げられる。

3. 遺跡周辺の地名（第4図）

「大畠」（おおはた）は「おばたけ」とも呼ばれていた。中心となる「字東大畠・字大畠一番・字大畠二番」の範囲は一辺約450mの方形で、この範囲内のやや西よりを東北本線が南北に通っている。「字東大畠」にある「雇用促進住宅」東側で正倉跡とされる縦柱建物跡が発見されている。ここを中心として、南が「字寺屋敷前」「字堂場前」、東が「郡山字荒屋敷」「郡山字観音崎」、北が「郡山字弥陀内」、西が「字祢宜内」、北西が「字十王堂」である。「寺屋敷」「堂場」「観音」「弥陀」「祢宜」「十王」「郡山字荒屋敷」には白山社がある。「刈田郡誌」では、大畠遺跡東側の斎が川対岸に、北から南に住吉神社・八幡神社・熊野神社・鹿島神社の四社があったとしている。鹿島神社のある鹿島山遺跡からは平安時代の瓦が出土している。

大畠遺跡の南隣に本郷遺跡がある。本郷遺跡も刈田郡家跡の一部と考えられる。地名は北半が「字堂場前」、南半が「字沢目」である。大畠遺跡から本郷遺跡にまたがる「字堂場前」の「堂場」は「道場」であり、中世に時宗の常林寺があつたことに由来する地名とも言われている。遺跡の西側には南から北に「字沢目」「字清水小路」「字不澄ヶ池」と、水に因んだ地名が並んでおり、遺跡の西側には南北の旧河道の存在が推定される。また、「字沢目」は白石駅の東西に伸びる地名であり、遺跡の南側にも東西の旧河道があつた可能性がある。



第4図 大烟遺跡周辺の地名

III 発見された遺構と遺物

1. 第1焼土遺構（第5図）

本調査区で残っている調査記録は「第1焼土遺構」と名付けられた遺構の位置図・平面図・断面図・スナップ写真だけであり、調査区配置図・調査区平面図・断面図などは残っていない。

以下、調査時に付けられた「第1焼土遺構」の名称で記述する。

〔遺構の位置〕

都市計画道路センター杭の入った遺構の位置を示す略図が残っており、それによると、遺構の検出地点は「字堂塚前73」地内で、ほぼ現在の「白石市消防団白石分団12班積載車庫」前の都市計画道路中央部分あたりになる。

〔遺構の検出〕

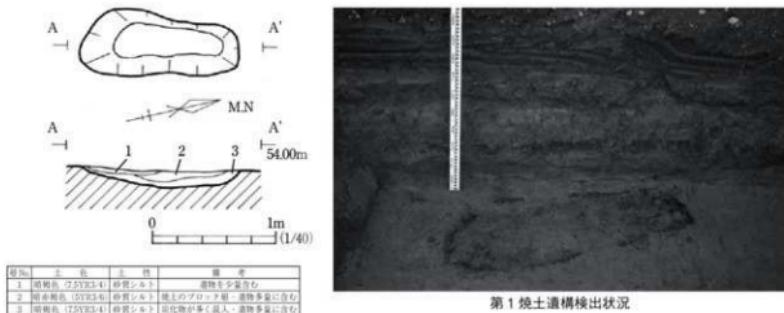
調査区平面図・断面図が残っていないが、調査風景などを撮影したカラーのスナップ写真中に調査区全景や調査区の断面写真がある。それを見ると、地表から遺構検出面までの深さは約1.5mある。遺構検出面はにぶい黄橙色土である。遺構が検出された際の調査区壁面の写真を見ると、遺構が検出された部分では検出面の黄橙色土の上に黒色土（厚さ約5～10cm）が乗っていることがわかる。黒色土には赤い土も含んでおり、炭化物や焼けた土と推定される。遺構の検出面はこの焼土を含む炭化物層の約30cm下であり、遺構は約30cmほど重機で削平してしまったようだ。

〔遺構の特徴〕

遺構の重複はない。平面形は中央部がやや狭まり、南部の幅が北部より広い楕円形である。長軸方向は磁北から14°東偏している。規模は南北約130cm、東西約40～50cm、深さ約10cmである。約30cmほどは重機で削平しているので、実際の規模はもっと大きく、深かったものと考えられる。底面から壁面への立ち上がりは、南部を除いて、ほぼ平坦な底面から丸味を持って緩やかに立ち上がっている。南部では底面から大きく開いて緩やかに上りながらそのまま端部に達しており、南端と南部の東西端では明確な壁面はない。壁面・底面に焼けて赤くなった部分や硬化した部分は固化されていないため、確認できない。

〔堆積土〕

3層に大別される。1層は南部にのみ分布し、遺構検出面の黄橙色土ブロックに焼土粒・炭化物粒をわずかに含む層。かわらけを若干含んでいる。2層は中央部から北側に分布し、焼土ブロックを主体とする層。層中に薄い炭化物層を挟んでいる。かわらけを多く含んでいる。3層は底面・壁面直上の層で全面を覆っている。炭化物を主体とする層で、わずかに焼土粒を含んでいる。かわらけを多く含んでいる。人為的に埋めた土ではなく、自然堆積層と考えられる。



第5図 第1焼土遺構

2. 第1焼土遺構出土の遺物

第1焼土遺構出土の遺物として遺物収納箱に保存してあったのは、かわらけ（大皿・小皿・耳皿）、土器飾器底部、刺離土器片、粘土塊である。これらは第1焼土遺構出土の一括資料である。

【かわらけ】（第6～7図）

全て手づくねかわらけである。大皿・小皿・耳皿がある。完形品は小皿2点だけであり、その他は破片である。破片点数は大皿17点、小皿104点、耳皿8点である。かわらけ総量は10578gである。小皿完形品1点が約42gであり、かわらけ総量を小皿に換算すると25点分になる。

ほとんどが半分も残っていない破片ではあるが、貴重な資料であり、全体の器形がわかるように反転実測して提示することにした。ただし、手づくねであるため、同一固体であっても口縁部から底部の外形や断面形態は一定しておらず、計測した箇所によって実測図の器形が異なってしまう。また、全体の器形を代表する部分で実測するよう努めたが、小さい破片は計測する箇所が限られており、図示したものが本来の器形の特徴を示していない可能性もある。実測図はこのことに留意して見ていただきたい。また、破片の中にはゆがんだものや接合している破片でも色調が全く異なるものもある。

【大皿】（第6図1～6）

図示できたのは6点のみである。完形品ではなく、破片を反転実測したものである。

【胎土・色調】

胎土には赤褐色の砂粒を多く含んでいる。色調はうす橙色（肌色）を基調としている。

【法量・器形】

1/4以上残っている大皿（第6図1～4）の口経平均値は12.2cm、底径平均値は6.0cm、底部の残っている大皿（第6図1・2）の器高平均値は3.0cm、全ての器厚平均値は0.65cmである。これに基にした、器高／口経値は0.25、底径／口経値は0.49であり、厚手で、口経の小さい大皿である。底部外面はやや凹んでいる。図示した大皿の口縁部には3形態（第6図1・4）、（第6図2・3）、（第6図5・6）が認められるが、一個体の口縁部には一つの形態だけではなく、他の形態の箇所もある。手づくねかわらけであり、口縁部形態の差異はヨコナデ調整の強弱によるものである。

【成形】

外面に粘土の接合痕が確認されるものがある。第6図1は接合痕が口縁端部から左斜め下に延びている。粘土板の接合痕跡かとも考えたが、中央部よりも周縁部に偏っており、粘土紐の接合痕跡と理解した。全て左回りの粘土紐巻き上げである（粘土紐の回転方向は内面を見て、底部中央から口縁部に巻き上げた方向）。

【器面調整】

【口縁部】口縁部には2段のヨコナデが施されている。第6図2・3の三角形状の口縁部のものは口縁端部「面取り」とされるものかもしれないが、2段のヨコナデである第6図1の口縁部には第6図2・3のように三角形になっている部分もある。また、外面のヨコナデに内面のヨコナデは対応しており、外面の1段目と2段目のヨコナデの屈曲に対応して内面も緩やかに2段に屈曲している。このため、「面取り」ではなく、全て2段ヨコナデが施されたものと理解した。底部と口縁部の境や1段目と2段目のヨコナデの境に鋭角な段がつくもの（第6図1・4・6）があり、何らかのヨコナデ工具を使用したものと推定する。外面口縁部のヨコナデが施されている部分はツルツルして滑らかで光沢がある。内面のヨコナデの筋は良好に観察されるが、外面のヨコナデの筋ははつきりしない。内面だけ、最終的な仕上げのヨコナデが施されているのかもしれない。内面のヨコナデを見ると、ヨコナデは下から上に施されている。ヨコナデには右回りが認められるもの（第6図2・3・4・6）がある。

【底部】

（外底面）底部外面はほぼ平坦であり、指痕のような凹凸はあまりない。ナデのような擦れた部分や沈線状の筋はあるが、規則性はない。板状圧痕、スノコ状圧痕とされているものは認められない。平坦部はツルツルして滑らかで光沢がある。平坦部に明確な器面調整痕は確認できないが、仕上げのナデなどが施されているものと理解される。平坦部中心はやや凹んでおり、指紋が確認され、光沢はない。

底部外面周縁部（平坦面から立ち上がった部分）は平坦部のような光沢はない。指オサエによる指頭痕のような凹凸も認められない。ナデのような筋が周縁部全面に見られるが、よく見ると器面調整のナデではなく、外底面中心部と同じ指紋の皺状のこまい筋である。これは製作中の生乾き段階で付いた指紋や指紋の擦れであろうと考えた。指紋の擦れが指ナデ状になっている部分もあるが、基本的には周縁部は無調整であると理解した。外底面平坦部は光沢があるが、周縁部と中心部は光沢がない。光沢のない周縁部と中心部には指紋や指紋の擦れが認められる。製作痕跡の新旧関係は指紋や指紋の擦れが古く、光沢面が新しいものと理解した。

（内底面）底面内部中央部全面に一定方向のナデが施されている。そのナデの上に、底部周縁部から口縁部にかけて2段のヨコナデが施されている。内底面のナデと周縁部から口縁部のヨコナデの痕跡は同じである。

【小皿】（第6図8～15・第7図1～45）

図示したのは53点である。完形品が2点ある。大部分は小破片からの反転実測図である。

【胎土・色調】

大皿と同じ胎土で、赤褐色の砂粒を多く含んでいる。色調は赤褐色・橙色・うす橙色・褐灰色・黒褐色など多様ではあるが、橙色を基調としている。大皿よりも赤味の強いものが多い。

【法量・器形】

比較的厚手の小皿である。口縁部の立ち上がりは基本的には直線的に外傾している。大きく開いたり、立ち上がりの急なものは少ない。意識して造った形ではなく、成形・調整時の手加減でそのような底部になったものと考えられるが、ほぼ平底のものと丸底気味のものがある。ほぼ平底のものが全体の75%を占める。ほぼ平底のものの内面は、底部から口縁部への境に屈曲があるが、丸底気味のものの内面は、底部と口縁部の境に屈曲はなくスムーズに立ち上がっている。

完形品2点の法量をみると、口経は7.5cmと7.3cm（平均7.4cm）、ほぼ平底のものの底径は5.3cm、器高は1.4cmと1.5cm（平均1.45cm）、器厚は0.5cmと0.4cm（平均0.45cm）である。2点だけであるが、器高／口経値0.19は、底径／口経値は0.71である。

参考に、破片実測したものでも法量をみてみる。1/4以上残っている小皿18点（第6図10～15、第7図1～12）の口経平均値は7.8cm、ほぼ平底のものの底径平均値は5.2cm、器高平均値は1.40cm、器厚平均値は0.45cmである。これに基にした、器高／口経値は0.18、底径／口経値0.72である。完形品とはほぼ同じ結果である。厚手で、口径の小さい小皿である。

【成形】

外面に粘土の接合痕が確認されるものが多く、いずれも粘土紐接合痕である。粘土紐巻き上げによるものと推定されるが、右回りのものと左回りのものがある。右回りのものが5点、左回りのものが26点である。回転方向のわかるものの内、約84%が左回りである。大皿も確認できたものは左回りであった。

【器面調整】

〔外面〕平底・丸底とともに、底部にはナデ状の痕跡が認められるが、基本的には無調整である。大皿の外底面周縁部と同じような、生乾き段階で付いた指紋とナデ状の指紋の擦れが確認される。指オサエによる指頭圧痕は認められない。板状圧痕・スノコ状圧痕もない。大皿の外底面中央平坦面で確認された光沢はない。焼成前底部穿孔のものが1点（第6図13）ある。

口縁部は1段のヨコナデである。底部との境に工具痕跡が確認されるものがある。回転方向がわかつたものは右回りのものが1点だけである。底部の指紋と指紋のすればヨコナデの上に付いており、大皿と同じように外面の最後の痕跡と考えられる。

〔内面〕底部には大皿と同じように一定方向のナデが施されている。底部周縁から口縁部は1段ヨコナデである。手順は大皿と同じで、内底面の一定方向ナデの後に口縁部の1段ヨコナデである。ヨコナデは右回りのものと左回りのものがある。右回りのものが28点、左回りのものが8点で、回転方向がわかつたものの内、約78%が右回りである。大皿も回転方向の確認できたものは全て右回りである。

【耳皿】(第6図7)

1点のみの特異な器種であるが、成形・調整・胎土・色調から手づくねかわらけである。

【胎土・色調】

胎土に赤褐色砂粒を含んでいるが、大皿・小皿と比べてその含有量は少ない。緻密で砂粒の少ないきめ細かい精選された胎土である。金雲母細粒も多く含んでいる。全体的に褐灰色を基調としたくすんだ色調である。焼成をしたのかもしれない。内外面にまだらに黒色物質が付着しており、その表面はやや光沢がある。ヘラミガキは確認されないが、黒色処理をしている可能性がある。

【法量・器形】

小皿よりはやや大き目の円盤の両側を折り曲げてつくっている。折り曲げる前の円盤の直径は約9cmで、低い口縁部がついたものである。折り曲げた部分の高さは約2cm、折り曲げていない部分の高さは約1cmであり、折り曲げていない部分の口縁部の立ち上がりは小さい。厚さは0.5cmである。底面は大皿・小皿と比して平坦で、平坦面が広い。

【成形】

粘土紐の接合痕が認められる。左回りの粘土紐巻き上げである。円盤の直径は大皿より小さく、小皿よりは大きいことから、初めから耳皿用の円盤としてつくられているようである。

【器面調整】

(外面) 外底面平坦部には全面に指紋や指纹の擦れが確認される。基本的には無調整である。中心部には渦状の指紋痕跡が認められる。底部周縁から口縁部にかけて2段に丁寧なヨコナデが施されている。1段目と2段目のヨコナデの境はくっきりとした棱となっている。折り曲げた部分にはヨコナデ後の軽い指痕痕と指紋が確認される。

(内部) 内底面中心部は器皿が剥落して不明瞭ではあるが、大皿・小皿と同様に一定方向のナデが認められる。その後、内底面周縁部から口縁部にかけてロクロナデ風の丁寧なヨコナデが施されている。

【土師器 壶】

図示していないが、土師器壺の底部から体部下端の破片が出土している。詳細な出土状況は不明である。手づくねかわらけと一緒に取り上げられている。壺の底部外面は平坦で木葉痕などはない。体部外面下端には指頭圧痕やナデが観察されるが特徴的な器面調整は不明である。内部の器面調整は判然としないがナデのようである。

胎土には石英・長石などの砂粒を多く含んでいるが、手づくねかわらけの胎土に特徴的に含まれていた赤褐色の砂粒は認められない。色調は明褐色を基調としているが、黒褐色の部分もある。黒褐色の部分は断面も同色であり、破片になってから火を受けて焼けものと考えられる。表面・断面ともに硬くなってしまっており、破片全体が火熱を受けた可能性がある。

【焼成時剥離土器片】(図版4-2)

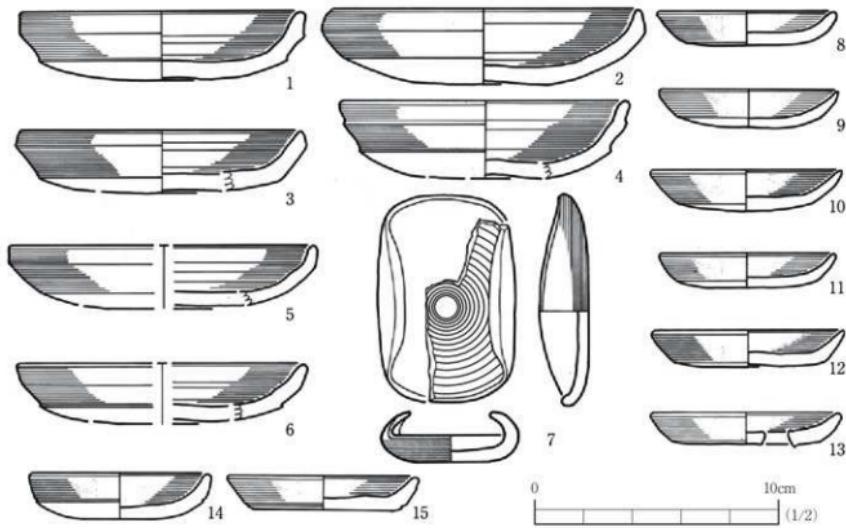
手づくねかわらけ皿類の表面が剥離した破片が5点ある。底部外面剥離片が4点、口縁部内面剥離片が1点である。胎土には赤褐色砂粒を含んでいる。これらは土器焼成に伴う「焼成時剥離土器片」(焼成破裂片)と考えられる。

【静止糸切り痕のような痕跡のある粘土塊】(図版4-3)

2.5cm×5cmの大きさの小さい粘土塊で、静止糸切り痕のような痕跡が確認できる。粘土塊には赤褐色の砂粒が含まれている。手づくねかわらけ素材の可能性がある。

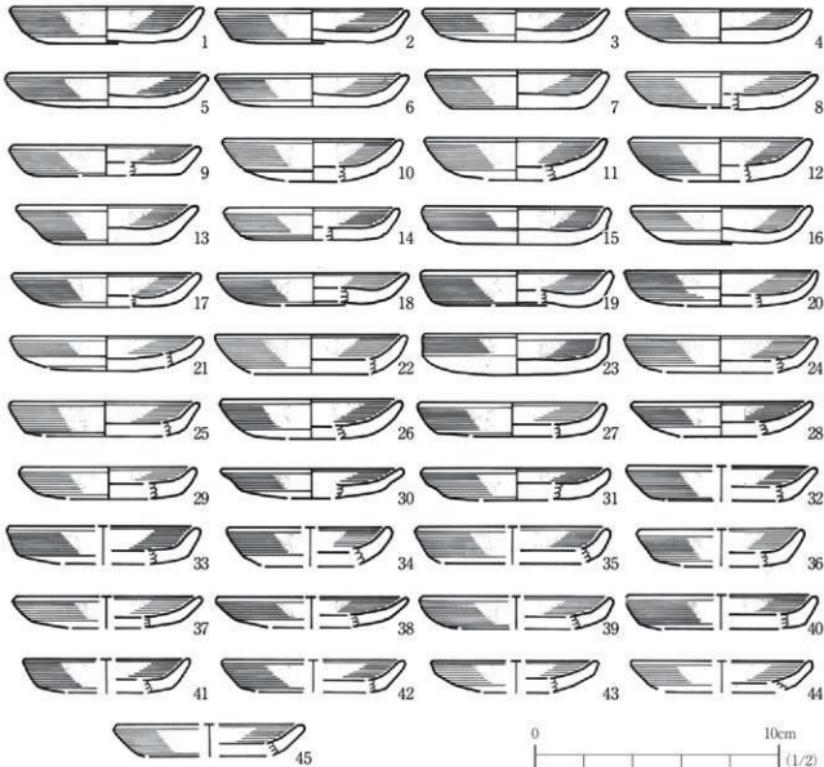
【スサ入り粘土塊】(図版4-4)

壁土の補強・亀裂防止のためにワラなどを混ぜ込んだスサ入り粘土のような塊が8点ある。赤褐色砂粒を含んでいない。高熱で表面が発泡したり黒く硬化した面をもつものがある。かわらけ窯の窯体破片(焼成粘土塊)の可能性がある。



番号	器種	成形	器面調整など			焼土	色調	焼存	正量(cm)		器高 cm	底径 + 口徑 cm
			外 面	内 面	助 手				口徑 cm	底径 cm		
1 大皿	粘土接着合板 (左回り)	底盤：中央凹沢・周縁無調整 口縁部：2段ヨコナード(ナデ工具痕跡)	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：2段ヨコナード 斜面多く含む	赤褐色 に古い褐色 (G5YR7/3b)	1/2	12.6	6.0	2.9	0.7	0.24	0.50	
2 大皿	粘土の接着板	底盤：中央凹沢・周縁無調整 口縁部：2段ヨコナード	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：2段ヨコナード (右回り)	赤褐色砂紋 に古い褐色 (G5YR7/3b)	1/3	12.6	6.0	3.1	0.7	0.25	0.48	
3 大皿	粘土の接着板	底盤：周縁無調整 口縁部：2段ヨコナード	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：2段ヨコナード (右回り)	赤褐色砂紋 を多く含む	1/3	12.0	6.0	2.9	0.7	0.20	0.50	
4 大皿	- 色調の異なる 織片が複合	底盤：周縁無調整 口縁部：2段ヨコナード (ナデ工具痕跡)	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：2段ヨコナード (右回り)	赤褐色砂紋 を多く含む 多く含む	1/4	12.0	6.0	3.2	0.7	0.26	0.50	
5 大皿	-	底盤：周縁無調整 (右回り) 口縁部：2段ヨコナード	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：2段ヨコナード (右回り)	赤褐色砂紋 に古い褐色 (G5YR7/3b)	1/8	12.0	6.0	2.9	0.6	0.20	0.56	
6 大皿	-	底盤：周縁無調整 口縁部：2段ヨコナード	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：2段ヨコナード (右回り)	赤褐色砂紋 に古い褐色 (G5YR7/3b)	1/10	12.0	6.2	2.9	0.6	0.21	0.52	
7 耳皿	粘土接着合板 (左回り)	底盤：全面無調整 底盤周縁～口縁部：2段ヨコナード	底盤～口縁部：全面ヨコナード風 斜面多く含む (右回り)	褐色 に古い褐色 (G5YR7/3b)	1/3	長さ：8.0 幅：6.0	2.1	0.5				
8 小皿	粘土接着合板 (右回り)	底盤：無調整 口縁部：1段ヨコナード	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：1段ヨコナード (右回り)	赤褐色砂紋 に古い褐色 (G5YR7/3b)	完形	7.5	5.3	1.4	0.5	0.20	0.53	
9 小皿	粘土接着合板 (左回り)	底盤：無調整 口縁部：1段ヨコナード	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：1段ヨコナード (左回り)	赤褐色砂紋 を多く含む	7.3	6.0	1.5	0.4	0.21	0.46		
10 小皿	粘土接着合板 (左回り)	底盤：無調整 口縁部：1段ヨコナード	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：1段ヨコナード (左回り)	赤褐色砂紋 に古い褐色 (G5YR7/3b)	1/2	8.0	5.6	1.6	0.5	0.20	0.45	
11 小皿	粘土接着合板 (左回り)	底盤：無調整 口縁部：1段ヨコナード	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：1段ヨコナード (左回り)	赤褐色砂紋 を多く含む	1/2	7.4	5.8	1.5	0.4	0.20	0.43	
12 小皿	粘土接着合板 (右回り)	底盤：無調整 口縁部：1段ヨコナード	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：1段ヨコナード (右回り)	赤褐色砂紋 を多く含む	1/2	8.0	4.8	1.5	0.4	0.19	0.60	
13 小皿	粘土接着合板 (左回り) 燒きひび大	底盤：無調整 口縁部：1段ヨコナード 燒きひび大 底盤中央部：燒成崩壊	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：1段ヨコナード (右回り)	赤褐色砂紋 を多く含む	1/2	8.0	5.8	1.1	0.5	0.73		
14 小皿	粘土接着合板 (左回り)	底盤：無調整 口縁部：1段ヨコナード (ナデ工具痕跡)	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：1段ヨコナード (右回り)	赤褐色砂紋 に古い褐色 (G5YR7/3b)	1/4	7.6	6.8	1.8	0.4	0.24	0.47	
15 小皿	粘土の接着板	底盤：無調整 口縁部：1段ヨコナード (ナデ工具痕跡)	底盤：中央一方向ナード 底盤周縁～口縁部：1段ヨコナード (右回り)	赤褐色砂紋 を多く含む	1/2	8.0	6.0	1.4	0.5	0.18	0.75	

第6図 第1焼土遺構出土遺物1



番号	器種	成形	器面調査など			粘土	色調	残存	正量(cm)		追跡量(cm)	器高(cm)	底径(cm)
			外面	内面	剖面				口徑	底径			
1 小瓶	粘土練合板 (左回り)	底面：無調整 口縁部：1段ヨコナデ	底面：中央一方向ナデ 底部周縁～口縁部：1段ヨコナデ (左回り)		赤褐色砂粒 を多く含む	褐色 (5YR6/6)	1/2	8.0	5.2	1.3	0.4	0.16	0.65
2 小瓶	粘土練合板 (左回り)	底面：無調整 口縁部：1段ヨコナデ	底面：中央一方向ナデ 底部周縁～口縁部：1段ヨコナデ (右回り)		赤褐色砂粒 を多く含む	灰褐色 (5YR6/3b)	1/2	8.0	5.8	1.4	0.5	0.18	0.73
3 小瓶	粘土の接合板	底面：無調整 口縁部：1段ヨコナデ	底面：中央一方向ナデ 底部周縁～口縁部：1段ヨコナデ (右回り)		赤褐色砂粒 を多く含む	灰褐色 (5YR6/3b)	1/2	7.8	4.4	1.3	0.4	0.17	0.56
4 小瓶	粘土練合板 (左回り)	底面：無調整 口縁部：1段ヨコナデ	底面：中央一方向ナデ 底部周縁～口縁部：1段ヨコナデ (右回り)		赤褐色砂粒 を多く含む	灰褐色 (5YR6/3b)	1/2	7.6	4.6	1.4	0.5	0.18	0.60
5 小瓶	粘土練合板 (左回り)	底面：無調整 口縁部：1段ヨコナデ	底面：中央一方向ナデ 底部周縁～口縁部：1段ヨコナデ (右回り)		赤褐色砂粒 を多く含む	褐色 (5YR6/6)	1/3	8.5	4.8	1.3	0.5	0.15	0.56
6 小瓶	粘土練合板 (左回り)	底面：無調整 口縁部：1段ヨコナデ	底面：中央一方向ナデ 底部周縁～口縁部：1段ヨコナデ (右回り)		赤褐色砂粒 を多く含む	灰褐色 (5YR7/3b)	1/3	8.0	5.4	1.3	0.5	0.16	0.68
7 小瓶	粘土練合板 (左回り)	底面：無調整 口縁部：1段ヨコナデ	底面：中央一方向ナデ 底部周縁～口縁部：1段ヨコナデ (右回り)		赤褐色砂粒 を多く含む	灰褐色 (5YR7/2b)	1/4	7.6	5.4	1.4	0.5	0.18	0.71
8 小瓶	粘土練合板 (左回り)	底面：無調整 口縁部：1段ヨコナデ (ナデ) (具底跡)	底面：中央一方向ナデ 底部周縁～口縁部：1段ヨコナデ (右回り)		赤褐色砂粒 を多く含む	灰褐色 (5YR6/3b)	1/3	8.0	4.8	1.4	0.4	0.18	0.60
9 小瓶	粘土練合板 (左回り)	底面：無調整 口縁部：1段ヨコナデ	底面：中央一方向ナデ 底部周縁～口縁部：1段ヨコナデ (右回り)		赤褐色砂粒 を多く含む	灰褐色 (5YR7/3b)	1/4	8.0	6.0	1.3	0.5	0.16	0.75

第7図 第1焼土遺構出土遺物2

第1號土遺構出土遺物觀察表

IV 遺構と遺物の検討

1. 第1焼土遺構

第1焼土遺構は約30cmほど削平されており、規模は小さくなっていると思われるが、その形態的特徴、堆積土の状況、出土遺物から土器焼成遺構（かわらけ窯跡）の可能性がある。

東北地方の中世前期の土器焼成遺構については中山雅弘氏の研究（中山：2001）があるが、近年、新たな調査例を踏まえた及川真紀氏による整理・研究がある（及川：2015・2016）。

及川氏は、陸奥国の12世紀のかわらけ窯跡の特徴として、①規模は長さ150～300cm、幅70～130cmであること、②平面形は楕円形や瓢箪形が多いこと、③底面は前庭部から焼成部に向かって下がっていること、④焼成部壁面は内傾していること、⑤壁面は強い被熱を受けていることが多いこと、⑥底面も被熱を受けているが側面よりも弱いこと、⑦底面に炭化物層が見られること、⑧堆積土に焼成粘土塊が含まれていることなどを挙げている。

この特徴に照らし合わせて、第1焼土遺構の特徴を再整理すると、①規模は長さ130cm、幅40～50cm、②平面形は瓢箪形に近い楕円形、③底面は前庭部（南半部）から焼成部（北半部）に向かって下がっている、④焼成部壁面の内傾は確認できないが、焼成部の可能性のある遺構北半部の堆積土2層は焼土ブロックの層である、⑤壁面の被熱は確認できない、⑥底面の被熱は確認できない、⑦底面から壁面に炭化物層が確認される、⑧出土遺物にスサ入り粘土塊（焼成粘土塊）があるとなる。

比較してみると、第1焼土遺構はかわらけ窯跡の特徴①～⑧の内、①②③⑦⑧はほぼ一致するが、④⑤⑥は一致していないことになる。ただ、約30cmほど削平されているため、規模は小さくなっている、④の壁面の内傾部分は削られてしまった可能性がある。さらに堆積土2層の焼土ブロックは内傾した焼成部壁面の崩落土とも考えられる。そうすると、⑤⑥だけが違っていることになる。つまり、第1焼土遺構の壁面・底面では焼けた赤く硬くなった面（焼結硬化面）が確認されないことである（平面図・断面図に焼結硬化面についての記録がないため分からぬ）。

出土遺物は手づくねかわらけと製作残滓（かわらけ素材・焼成時の剥片・窯体破片）である。かわらけ胎土に含まれている赤褐色砂粒は大烟遺跡出土の土師器でも確認されるものであり、この地の粘土を素材としていることがわかる。かわらけは完形品が小皿2点（内、1点は接合して完形品になったもの）だけがあり、ほとんど破片である。破片だけのは、失敗品を廃棄したためと推定され、かわらけの生産地であることを示している。また、かわらけには、ゆがんで曲がったもの、色調がまだらなもの、色調の異なるかわらけが接合したものもある。このようなかわらけの存在も消費地ではなく、生産地の遺物の特徴を示している。色の違う破片が接合しているものは二度焼きされた破片との接合であり、最低二回はかわらけを焼いた可能性が考えられる。

製作残滓としては、かわらけ素材と考えられる静止糸切り痕のような痕跡のある粘土塊（赤褐色砂粒を含む）、土器焼成時の高温で表面が剥落した「焼成時剝離土器片」（焼成破裂剥片）、窯体と考えられるスサ入り粘土塊（焼成粘土塊）を確認している。また、土師器甕底部は窯体の補強材として使用された可能性が考えられる。これらの製作残滓も生産地ならではの特徴的な遺物と理解される（「焼成時剝離土器片」「焼結硬化面」「焼成粘土塊」などの土器焼成に関連する言葉は、徳澤・奥富：2006による）。

第1焼土遺構は壁面・底面の焼面がなく、土器焼成遺構（かわらけ窯跡）とするには躊躇するものではある。ただ、壁面の焼面は遺構確認時に削ってしまった可能性があり、底部の焼面も手づくねかわらけ窯跡の大崎市名生館遺跡SX273窯跡（後藤：1984）は焼けが弱く、ロクロかわらけ窯跡の角田市田町裏遺跡（手塚：1991 中村・斎藤：1994）では焼けていないものも確認されている。焼面以外の遺構・遺物の特徴は全てかわらけ窯跡である可能性を強く示唆するものである。以上のことから、第1焼土遺構はかわらけ生産地の何らかの遺構であることは間違いないものであり、本報告では、かわらけ生産地の遺構であることを積極的に評価して、かわらけ窯跡として提示したい。

及川氏は、陸奥国の12世紀の手づくねかわらけ窯跡として、宮城県大崎市名生館遺跡SX273窯跡（後藤：1984）・岩手県紫波郡紫波町下川原遺跡SK124（岩手県文化振興事業団：2011）・岩手県奥州市白

鳥館遺跡 10SF200（奥州市：2012）の3遺跡を挙げている。これらのかわらけ窯跡は①前部と焼成部があり、②前部から焼成部に向かってスロープ状に下がり、③焼成部壁面は焼けて内傾している特徴があるとし、これらの特徴をもつ手づくねかわらけ窯を「名生館タイプ」としている。「名生館タイプ」の手づくねかわらけ窯の出現は12世紀中頃であり、手づくねかわらけ窯としては12世紀代で終了するものとしている。このタイプの窯は13世紀になると、角田市田町裏遺跡・丸森町大古町遺跡（伊藤：1999）などで見られるようなロクロかわらけ窯になるとされる。また、手づくねかわらけ窯は13世紀になると、郡山市馬場中道遺跡（郡山市教委：1983）のような煙管状焼成窯に変わるとされている。

第1焼土遺構は及川氏の「名生館タイプ」の手づくねかわらけ窯跡と考えられ、その窯跡形態の変遷案からはほぼ12世紀後半代のものと推定することができる。

2. 第1焼土遺構出土の遺物

ここでは第1焼土遺構出土遺物の内、手づくねかわらけについて検討する。

手づくねかわらけには、大皿・小皿・耳皿がある。これらは第1焼土遺構（かわらけ窯跡）で焼かれたものである。まず、各器種の特徴を再整理する。

貴重な資料であるため、破片も極力図化して提示することに努めたが、当然ながら手づくねであるため、成形・調整の仕方や強弱、工人の癖・熟練度などによってもさまざまな器形のバリエーションが生まれる。さらに、計測部位と残存度によっても実測図の器形が変わってしまう。再整理にあたっては器形の特徴は大きく捉え、法量・成形・調整・胎土・色調などの属性を重視する。

【各器種の特徴】

【大皿】

図示したのは6点。完形品はない。

〔胎土・色調〕赤褐色砂粒が多く含んでいる。うす橙色（肌色）を基調としている。

〔法量・器形〕口経平均値12.2cm、底径平均値6.0cm、器高平均値3.0cm、器厚平均値0.65cmである。器高／口経値は0.25、底径／口経値は0.49である。厚手で、口経の小さい大皿である。口縁部には3形態が認められるが、ヨコナデの強弱によるものである。

〔成形〕粘土紐巻き上げ痕跡の確認されたものがある。それらは全て左回りである。

〔器面調整〕口縁部には2段のヨコナデが施されている。外面のヨコナデには工具痕跡の認められるものがある。ヨコナデは下から上に施されており、内面は、内底面の一定方向のナデの後に口縁部のヨコナデをしている。右回りのヨコナデが確認されるものがある。ヨコナデされている口縁部外面は光沢がある。底部には指頭痕跡・板状圧痕・スノコ状圧痕は認められない。ただ、外底面平坦部は光沢があり、周縁部は光沢がない。平坦部に明確な器面調整痕は認められないが、ナデなどの仕上げ処理されているものと考えられる。外底面平坦部中心と周縁部には指紋や指紋擦痕が確認され、無調整である。

【小皿】

図示したのは53点。完形品が2点（内1点は接合復元）あるが、他は全て破片である。

〔胎土・色調〕赤褐色砂粒が多く含んでいる。橙色を基調としているが、赤褐色・うす橙色（肌色）・褐色・黒褐色など多様である。大皿よりも赤味の強いものが多い。

〔法量・器形〕ほぼ平底のものと丸底気味のものがあり、約75%がほぼ平底である。完形品の法量は、口経平均値7.4cm、底径平均値5.3cm、器高平均値1.45cm、器厚平均値0.45cmである。厚手で、口径の小さい小皿である。

〔成形〕粘土紐巻き上げ痕跡が確認されたものがある。その内、約84%が左回りである。

〔器面調整〕口縁部には1段のヨコナデが施されている。外面のヨコナデには工具痕跡の認められるものがある。ヨコナデは内底面の一定方向のナデの後に口縁部のヨコナデをしている。内面のヨコナデの回転方向のわかったものの内、約78%が右回りである。底部には指頭圧痕・

板状圧痕・スノコ状圧痕やナデ等の器面調整痕は認められず、基本的に無調整である。外底面の光沢はない。焼成前底部穿孔のものが1点あるが、意識して穿孔したものなのかはわからない。「穿孔かわらけ」(鹿野:2012)とされている焼成後のかわらけに孔を開けたものとは違う。

【耳皿】

1点のみ出土している。特殊品である。

〔胎土・色調〕赤褐色砂粒はわずかだが、金雲母細粒を多く含んでいる。緻密で砂粒の少ないきめ細かい精選された胎土である。憚し焼きをしたような褐灰色を基調としている。内外面にまだらではあるが黒色物質が付着している。黒色処理の痕跡であろうか。

〔法量・器形〕小皿よりやや大きい約9cmの耳皿用の円盤に短い口縁部をつけた後で両側を折り曲げている。高さは、短い口縁部の部分で約1cm、折り曲げた部分では約2cmである。底部は厚さは約0.5cmで、外底面は平坦である。

〔成形〕左回りの粘土紐巻き上げである。

〔器面調整〕外面は指紋は確認されるが無調整である。口縁部は2段のヨコナデが丁寧に施されている。内面は中央部一定方向のナデの後、周縁部から口縁部にロクロナデ風の丁寧なヨコナデが施されている。

【大畠遺跡の手づくねかわらけの編年位置】

宮城県内では、12世紀とされる手づくねかわらけは栗原市金峯山花山寺跡、栗原市伊治城跡、本吉郡南三陸町田東山寂光寺跡、大崎市名生館遺跡、多賀城市多賀城跡、多賀城市山王遺跡、多賀城市新田遺跡、仙台市中野高柳遺跡、仙台市洞の口遺跡、仙台市南小泉遺跡、仙台市王ノ壇遺跡、仙台市今泉遺跡、仙台市四郎丸遺跡、仙台市中田南遺跡、伊具郡丸森町大古町遺跡などで出土している。ほとんどが仙台市以北の遺跡であり、県南部の遺跡は大古町遺跡だけである。

大畠遺跡の手づくねかわらけの編年の位置について検討するために、平泉型手づくねかわらけに関する八重樫忠郎氏（八重樫：2001・2016a・2016b）・羽柴直人氏（羽柴：2001・2010・2014）・井上雅孝氏（井上：1996・2016）の研究を整理する。

〔器形〕深手大杯型→薄手皿型→厚手小皿型へと変化する（八重樫：2016b）。

〔法量〕①12世紀中葉、手づくねかわらけが導入される。最初期の手づくねかわらけの口経は約16cm、器高が4cmと大型である。その後、次第に口経が小さくなり、12世紀後葉、最終段階の手づくねかわらけ大皿の口経は約13cmである（羽柴：2010・八重樫：2016a）。

②平泉の手づくねかわらけの法量は口経平均値15.8～13.4cm、器高は3.9～2.7cm、器高／口経値は0.25から0.20へ変化し、口経・器高共に縮小していく傾向にある（井上：2016）。

③平泉最終期の手づくねかわらけは柳之御所遺跡52SE8出土のもので、年輪年代1186年の折敷と共に伴している（羽柴：2001・八重樫：2016a・井上：2016）。

52SE8出土の手づくねかわらけ11点（大皿10点・小皿1点）の法量を実測図から計測すると、大皿の口経が12.4～14.4cm（平均13.6cm）、器高が2～3.2cm（平均2.8cm）、小皿の口経が8.8cm、器高が2cmである。

④12世紀第4四半期の比爪の手づくねかわらけは平泉よりも口経が小さい（羽柴：2010・2014）。

⑤12世紀後葉、鎌倉の大倉幕府周辺遺跡の大皿の口経は15cmである（八重樫：2016a・2011）。

〔器厚〕①京都は3～4mm前後、平泉は5mm強、葦山・鎌倉は6～7mm前後である。12世紀後葉、非常に分厚い手づくねかわらけが出現する（八重樫：2016a）。

②比爪のものは平泉のものよりも厚手である（羽柴：2010・2014）。

〔胎土〕導入期、手づくねかわらけとロクロかわらけの胎土は明確に異なるが、最終段階の手づくねかわらけにはロクロかわらけの胎土と同じものが出現する（羽柴：2001・八重樫：2016a・2016b）。

〔色調〕①京都は白色に近く、平泉は灰白色から肌色、葦山は肌色から橙色、鎌倉は橙色から赤褐色で、大きくなると赤色に変化する（八重樫：2016a）。

②比爪のものは橙色を基調とする（羽柴：2010・2014）。

〔質問〕京都は硬質、平泉・並山・鎌倉はやや軟質である（八重樫：2016a）。

〔調整〕①平泉は口縁部2段ナデであるが、12世紀第4四半期には1段ナデになる（八重樫：2016a）。

②比爪は口縁部3段ナデを特徴とする（羽柴：2010・2014）。

以上の整理を基に、大畠遺跡の手づくねかわらけの編年的位置と実年代について考える。

平泉型手づくねかわらけ大皿の口経・器高は新しくなるにつれて小さくなる傾向があり、最終末期とされている柳之御所遺跡52S E 8出土の手づくねかわらけ法量は口経平均13.6cm、器高平均2.8cmである。大畠遺跡の大皿の口経平均は12.2cm、器高平均は3.0cmであり、平均値は52S E 8と比べて、器高はほぼ同じであるが、口経はより小さい。ただ、52S E 8の大皿には大畠遺跡の大皿に近い口経12.4cmのものも含まれており、大畠遺跡は52S E 8とはほぼ同時期の手づくねかわらけと考えられる。

12世紀第4四半期の比爪の手づくねかわらけは平泉よりも口経が小さいとの指摘もあるが、比爪でも大畠遺跡のように口経の小さいものの類例は確認できなかった。

法量だけでは単純に比較すると、柳之御所遺跡52S E 8の手づくねかわらけが年輪年代1186年の折敷と共に伴していることから、大畠遺跡の手づくねかわらけは平泉型手づくねかわらけの最終末期1186～1189年（奥州合戦）のものと推定される。ただ、本窯跡の手づくねかわらけは消費地からの出土がまだ確認されておらず、年代を付与することのできる共伴遺物は不明である。

ここでは、大畠遺跡の手づくねかわらけの年代は大きく12世紀後葉のものと捉えておきたい。

【大畠遺跡と多賀城跡周辺の手づくねかわらけ】

多賀城市多賀城跡と仙台市中野高柳遺跡出土の手づくねかわらけを実見する機会を得た。実見した手づくねかわらけは、12世紀中葉から13世紀初頭とされる多賀城跡I群土器（古川：2007・2010）、12世紀後半とされる中野高柳遺跡S X 1200遺物包含層上層（村田・白崎：2005・村田・保原・白崎：2006）出土のものである。その特徴を整理しておく。

〔調整〕多賀城跡I群土器の12世紀中葉の手づくねかわらけ大皿の内面は、内底面の一定方向のナデの後、口縁部を下から上に丁寧にヨコナデしている。平泉型の手づくねかわらけの特徴を示している。大畠遺跡の調整も同様である。

〔色調〕多賀城跡・中野高柳遺跡は白色から灰白色である。大畠遺跡は赤味がかったものが多い。

〔胎土〕多賀城跡・中野高柳遺跡は精選され、砂粒を含まず、なめらかで細かい。大畠遺跡は砂粒を含んでいる。

〔器厚〕多賀城跡・中野高柳遺跡は薄手である。大畠遺跡は厚手である。

〔年代〕多賀城跡I群土器と中野高柳遺跡S X 1200遺物包含層上層の手づくねかわらけは、器形・法量、色調・胎土・器厚から、大畠遺跡よりも古手のものと推定される。

【大畠遺跡と大古町遺跡の手づくねかわらけ】

丸森町大古町遺跡はこれまで宮城県南部地域で唯一手づくねかわらけが出土していた遺跡である。本報告で、宮城県南部の手づくねかわらけの出土遺跡は2遺跡になった。大古町遺跡は大畠遺跡の南東約17kmにある。大古町遺跡は阿武隈川沿い、大畠遺跡は奥大道沿いにある。

大古町遺跡の報告書で公表されている手づくねかわらけに関する情報は実測図3点（小皿）・写真7点（大皿2点・小皿5点）・かわらけ観察表であり（伊藤：1999）、成形と大まかな器形しか分からない。大古町遺跡の手づくねかわらけを実際に観察した八重樫忠郎氏は「非常に退化した在地系のもの」（八重樫：2001・2016a）で、「12世紀第4四半期」（八重樫：2001）とし、羽柴直人氏は「口縁部の器壁が膨隆し、肥厚している特徴がある。稚拙な感じの作りで手づくねかわらけの製作に熟達していない人が製作した」もので、「12世紀第3四半期以降のもの」（羽柴：2010）としている。

今回、大古町遺跡のかわらけを観察する機会を得た。羽柴氏が自ら新たに実測して論文（羽柴：2010）に載せている8点（大皿3点・小皿5点）を中心に観察した（第8図）。以下、大古町遺跡と大

畠遺跡の手づくねかわらけの特徴を比較して整理しておく。

〔成形〕両遺跡とも粘土紐巻き上げ痕跡が確認される。

〔胎土〕両遺跡とも砂粒が多く混入し、赤褐色砂粒を含んでいるが、大古町遺跡の方が砂粒が多く、また、金雲母細粒を含んでいる。

〔色調〕小皿は両遺跡とも橙色を基調としている。大皿は大畠遺跡がうす橙（肌）色、大古町遺跡が暗赤灰色を基調としている。

〔器厚〕両遺跡とも厚手である。大畠遺跡は厚さが一定であるが、大古町遺跡は底部は薄く、口縁部は厚い。

〔調整〕両遺跡とも基本的には同じであるが、大古町遺跡の方が雑で、器面がデコボコしており、調整の不明瞭なものが多い。大古町遺跡の大皿口縁部のナデは大畠遺跡のようなほぼ一周するヨコナデ風ではなく、単位の短いナデの連続である。大古町遺跡の大皿内底面のナデは土師器窯内面のようなハケメ状・ヘラナデ状の工具痕跡が明瞭である。内底面ナデの方向は大畠遺跡のような一定方向の直線ではなく、丸底の弯曲に合わせて多方面から丸味を持って施されている。大古町遺跡の小皿内底面のナデは分からなかった。

〔器形〕大皿は大古町遺跡は丸底風で深めの杯型、大畠遺跡は皿型である。小皿は同じ皿型である。

〔法量〕大古町遺跡は大皿が口経平均13.8cm・器高平均3.6cm、小皿が口経平均8.3cm・器高1.8cmで大皿・小皿共に、大古町遺跡の方が口経は大きく、器高は高い。

〔年代〕大古町遺跡の大皿は深めの杯型で、大畠遺跡よりも口経が大きく、器高が高い。法量からは、大畠遺跡よりは年代的に古手の特徴を示している。

〔大古町遺跡手づくねかわらけの類例〕

大古町遺跡の手づくねかわらけは平泉よりも比爪の手づくねかわらけに類似しているように見える。比爪の手づくねかわらけの特徴は、口縁部3段ナデで、色調が橙色を基調とし、器厚が厚く、12世紀第4四半期のものは平泉よりも口経が小さいことである（羽柴：2010・2014）。大古町遺跡の手づくねかわらけに3段ナデは確認されないが、色調・器厚・口経は比爪のかわらけに類似している。

大古町遺跡の大皿の法量は、12世紀第4四半期とされる比爪の小路口I遺跡の大皿の口経・器高に近い（羽柴：2010）。口経が小さくなる段階でも、器形が深めで杯型のものは平泉よりも比爪に認められる。大古町遺跡の手づくねかわらけに比爪のかわらけの影響はないだろうか。

比爪の手づくねかわらけの最大の特徴である口縁部3段ナデは確認されないものの、比爪と大古町遺跡のある伊具郡南半（金原保）の関連に注意しておきたい。12世紀、伊具郡の東隣の亘理郡は「亘十郎清綱」藤原清綱の所領であった。清綱は清衡の子、基衡の弟であり、比爪藤原氏の始祖である。大古町遺跡に比爪藤原氏が何らかの関与をしていた可能性はないだろうか。

【大畠遺跡の手づくねかわらけ耳皿】

1点のみであるが、手づくねかわらけ耳皿が出土している。精選された胎土で、ロクロナデ風のきれいなヨコナデが施され、黒色処理された可能性もある、薄く丁寧なつくりのものである。胎土には金雲母細粒を多く含んでいる。形態的には、古代の耳皿に似ており、戦国時代以降の耳かわらけとはやや異なる。窯跡からの一括出土であることから、大皿・小皿とセットで使用されたものと推定される。調べた範囲では、宮城県内からのかわらけ耳皿の出土は確認できなかった。平泉では平泉藤原氏時代の大量のかわらけが出土しているが、耳皿はごく少数とされている（八重樫：2016a）。

宮城県内の古代の耳皿は、綠釉陶器・灰釉陶器・土師器・赤焼土器（須恵系土器）のものが多賀城跡を中心に郡衙や官衙関連遺跡などから出土しているが、その出土量は少なく、9世紀後半から10世紀中頃までの時期のものである。出土遺跡・出土量・年代に耳皿の特徴が表れているものと推定される。

全国の耳皿については伊藤正人による総合的な整理・研究（伊藤：2000）がある。伊藤氏によると、かわらけの耳皿は今も神社の神饌に使用されているが、遺跡から出土している耳皿には綠釉陶器・灰釉陶器・須恵器・土師器・黒色土器・山茶碗などのものがあり、その主な用途は箸全体を水平に載せる「箸台」（箸の先端だけを載せる「箸置」とは違う）であるという。古代には宮中儀礼・王朝国家的

儀礼に伴い平安京で多用され、地方にも普及した。10世紀以降、平安京での出土は減少傾向にあるが、地方では10世紀代に一時期出土例が増加し、その後は地方でも次第に減少したという。平安時代末期以降、鎌倉時代・室町時代前半は激減し、全国的に出土例がほとんど見られない空白期である。ところが、戦国時代になると、古代の耳皿に起源を持つとされる「耳かわらけ」が全国に普及する。公家の儀礼が地方の武家社会の儀礼として定着し、以後、江戸時代まで継続して使用されたものとされている。

耳皿の使用に関しては、「耳皿の使用状況は、各時代を通じて、かなり限られたもの」で、「耳皿が単独で用いられることは無く」、「その使用場面・使用者（対象）は、かなり限定されている。通常は、神饌に象徴されるように、一部の膳にのみ用いられ、その使用対象は、神聖な者、高貴な者、ハレの場にふさわしい者に限られている。宴席等において、多数が用意されることもあるが、これはハレの場・神聖な場を示すものであろう。…「箸台」の存在は、その背景に限定された使用場面が存在したことを示す」もので、戦国時代以降は耳皿形態の「箸台」（耳かわらけ）が「かわらけを主体とした式三献の膳に限って用いられたもの」と考えられている（以上、伊藤：2000による）。

本窯跡の手づくねかわらけ耳皿がどこで、どのように使われたのかは、消費地からの出土がないので分からぬ。神社の神饌用などのかもしれないし、居館での宴席用なのかもしれない。宴席用であれば、大皿・小皿・耳皿のセットで使用された可能性が強い。ただ、宴会儀礼で使用されたものと仮定しても、希少で通常の宴会では使用されないものであり、特別な宴会で、特別な人物が参加した宴会で使用されたものと推測される。本窯跡の手づくねかわらけ3点セットは奥州合戦前夜に製作され、使用されたものである。その時期、刈田郡にとって、特別な人物が参加する特別重要な宴会とはどのようなものであったろうか。特別な人物は誰なのか、何のための特別な宴会なのか、知りたいものである。

【大畑遺跡の手づくねかわらけの生産と消費】

【生産地・製作工人】

本窯跡は大畑遺跡の南端に位置しており、ほぼ古代陸奥国刈田郡衙南方の周縁部にあたる。斎が川西側の自然堤防上に立地しており、窯跡の東、約120mを斎が川が北流している。この大畑遺跡の南縁周辺の自然堤防上からは古代の土器焼成構と推定される土坑が数基発見されている（未報告）。郡衙の縁辺にあり、土器づくりには刈田郡衙に関わる専属の工人集団の関与が推定される。

これまで、10世紀後半以降の刈田郡衙に関連する遺構は確認されていないが、本窯跡での手づくねかわらけの生産は古代刈田郡衙の工人集団の系譜に連なる工人によるもの可能性がある。本窯跡の手づくねかわらけには次のような特徴がある。

1. 大皿・小皿の胎土は古代の土師器と同じであり、この地域の粘土を主に使用している。
2. 大皿・小皿・耳皿で粘土紐の痕跡を確認した。これは粘土紐巻き上げによるものであり、古代の須恵器杯・ロクロ土師器杯・赤焼土器（須恵系土器）杯の製作技法と同じである。本来、手づくねかわらけは粘土板結合法と言われる粘土板（帯）貼り合わせ技法を特徴としているが、本窯跡出土の手づくねかわらけで明確に確認できたものはない。
3. 小皿・耳皿の底部は基本的に無調整である。大皿は外底面平坦部がツルツルして滑らかで光沢があるが、平坦部中心と周縁部は光沢がなく、指紋や指紋擦痕がある。この外底面中心部と周縁部は基本的に無調整である。大皿外底面平坦部の光沢は使用痕ではないため、製作技法・製作手順によるものと考えられる。光沢のある部分に明確な調整痕は確認できないが、外底面に施したナデなどの仕上げ処理による光沢と理解したい。この光沢のある外底面平坦部の内面には、光沢に対応するよう一定方向のナデが施されている。

尚、この光沢のある外底面平坦部は直径約6.5cmの円形である。この平坦部中心と周縁部は指紋が付いた無調整部分である。平坦部中心はやや凹んでいる。これらも製作技法・手順による痕跡である。円形にひびが入っているものは確認されないが、光沢のある外底面平坦部は円形の粘土板の可能性も考えられる。古代の須恵器杯・赤焼土器（須恵系土器）杯の製作技法である「底部円柱づくり」（服部・福田：1979）をベースにした製作痕跡の可能性である。直径約6.5cmの円形粘土板を成形の土台にし、その周縁から上方の口縁部まで粘土紐を巻き上げて基本成形をしたとも推定される。外底面

平坦部中心の凹み、そして平坦部中心と周縁部の指紋や指紋擦痕は円形粘土板を使用して製作した際の痕跡の可能性も考えられる。窯跡から出土している静止糸切り痕のような痕跡のある粘土塊は円形粘土板の製作に関わる遺物なのかもしれない。

4. 器面調整の手順から推定される大皿の製作工程は、①基本成形：粘土紐巻き上げ技法により、手づくね大皿の形に指で整える。②成形・器面調整：基本成形後、口縁部内外面にヨコナデを施す。底部外面平坦部にナデ仕上げ処理を施す。外面は上の口縁部と下の底部平坦面はツルツルして滑らかで光沢があるが、その間の底部周縁部は無調整で指紋・指紋擦痕が残り光沢はない。③内面調整：内面全面に仕上げのナデを施す。内底面に一定方向のナデを施した後、口縁部に下から上の順番で2段のヨコナデを施す。小皿も大皿と基本的に同じであるが、外底面中央部平坦面の仕上げナデはない。
5. 色調はうす橙色（肌色）、橙色、褐灰色、赤褐色など多様である。ロクロ土師器杯・赤焼土器（須恵系土器）杯の色調に類似しているが硬質であり、赤焼土器（須恵系土器）杯により近い。赤焼土器（須恵系土器）杯の窯体構造・焼成方法と基本的には似ているものと推定される。
6. 手づくねかわらけであるが、形に崩れがなく整っており、器厚はやや厚めではあるが、一定の厚さで、器面の凹凸も無く、調整も丁寧で、つくりがしっかりしている。ヨコナデは丁寧で長めに施されており、ロクロナデのようにきれいである。

以上のような特徴から、本窯跡の手づくねかわらけは古代からの伝統的土器製作技法を基本にして作られたものであり、ロクロ土器工人が製作したものと推定される。郡衙専属工人の系譜に連なる熟練した工人が製作した可能性が考えられる。12世紀第3四半期の大崎市名生館遺跡S X 273窯跡（後藤：1984）も本例と同様に官衙内で発見された手づくねかわらけ窯跡であり、官衙専属工人との関連が想定される。

【消費地・流通】

本窯跡の手づくねかわらけは他の遺跡からの出土を確認していない。現在、その消費地については不明と言わざるをえないが、その第一候補地は窯跡の近くにある。

本窯跡の北東約300mにある[大畑遺跡H 19 ①地点]である。調査面積115m²の小規模調査であるが、長さ約8.5m・幅約2m・深さ約45cm、断面形V字の屋敷内区画溝と推定されるSD 03溝から、飯坂毘沙門平窯産須恵器系陶器大甕、常滑三筋文壺、龍泉窯系青磁碗I 2類・皿I 1類、白磁碗・皿など12世紀後葉の遺物の出土している（日下・佐藤：2008）。また、報告書で同溝出土の土師器杯として図示されている土器は赤焼土器（須恵系土器）かロクロかわらけの可能性がある（第9図2）。出土遺物を再点検すると、同溝からは別個体の同種の口縁部・底部片も出土していたことを確認した（第9図1）。2点とも、底部は回転糸切り、内外面はロクロナデ、色調は赤褐色で、胎土は大粒の砂粒が少なく、金雲母を多量に含んでいる。未報告の口縁部・底部の破片から復元した実測図（第9図1）はやや深めの小皿である。この器形は12世紀第1四半期とされる柳之御所遺跡52 S E 10のロクロかわらけ小皿（井上：2016）に類似している。

常滑三筋文壺、須恵器系陶器大甕、青磁碗・皿、白磁碗・皿が出土しており、遺物からは刈田郡司クラスの有力者の居館跡と推定される。この居館跡で、本窯跡の手づくねかわらけによる宴会儀礼が行われていた可能性は十分に考えられる。

中世前期のかわらけ窯跡は河川の近くから発見される例が多いとし、河川を介したかわらけの流通を想定する見解がある（及川：2015・2016）。本窯跡は居館跡の近くにあり、居館に付属した窯と考えられるが、かわらけの河川による流通の可能性を否定するものではない。

V 古代末から中世前期の刈田郡とその周辺

本遺跡から平泉型の手づくねかわらけが出土した歴史的意味を考えるために、①12世紀前後の刈田郡とその周辺地域の歴史的環境、②刈田郡と奥州合戦、③刈田郡の三澤安藤氏の3点について、平泉藤原氏との関連を中心に整理する。

1. 刈田郡とその周辺の歴史的環境

[刈田・柴田郡]

刈田峯神社・大高山神社：11世紀末、式内社である刈田郡の刈田峯神社（藏王町宮）と柴田郡の大高山神社（大河原町金ヶ瀬）の神領は神祇官長官（神祇伯）の白川家の莊園であった。永万元（1165）年の「神祇官諸社年賃注文」には、白川家出身の神祇伯・康資王（寛治4（1090）年没）の時、莊園の現地管理者である平泉藤原氏初代清衡が刈田峯神社と大高山神社の年貢を黄金で代納したとの記録がある（亘理・中橋：1979 藏王町史編さん委：1987 遠藤：1993 岡田：1994 佐藤：2015 清水：2015）。

後三年合戦直後、清衡は神祇官・摂関家・寺社などの中央権門と所領寄進・年貢貢納・賀馬などを通して関わりを持ち、奥羽での政治的な地位を高めようとしていたとされる。南奥寄りの刈田・柴田郡はこの頃すでに藤原清衡の支配下にあったことになる。

『安永風土記』「宮村真言宗官本坊蓮藏寺書出」には、刈田峯神社北方の「宮宇願行寺」にあったとされる藏王駿騒の寺院・願行寺も三代秀衡の庇護を受けたとある（藏王町史編さん委：1987）。「藏王町史 通史編」「藏王信仰史」では、刈田峯神社と願行寺は平泉藤原氏以前の安倍氏の時代からその庇護を受けていたとしている（小紫：1994）。

[柴田郡]

柴田郡は刈田郡の北隣の郡。現在の柴田郡大河原町・柴田町・村田町・川崎町の範囲である。その東隣が伊具郡、北隣が名取郡、そして西隣が出羽国最上郡である。

大高山神社の九輪塔：柴田郡大河原町金ヶ瀬にある大高山神社には鉄九輪塔（塔身とされる部分のみ燈籠の一部として残存。通称「文治の九輪塔」）と言われているものがある（註1）。平泉藤原氏三代秀衡の三男忠衛（妻は信夫庄司佐藤元治の娘）が奉納したものとされている。文治3（1187）年7月10日、忠衛は塙釜神社に鉄燈籠（通称「文治の鉄燈籠」）を寄進しており、この大高山神社の鉄九輪塔とされるものその頃に奉納されたと考えられている（平間・鈴木：1989）。

塙釜神社への鉄燈籠の寄進は秀衡が没する3ヶ月前のことである。すでに源義経が平泉にいる状況の中、東北鎮護・陸奥国一之宮に何を願って燈籠を奉納したのであろうか。大高山神社は阿津賀志山のすぐ北、奥大道沿いにある平泉藤原氏支配地内の陸奥国内陸部最南端の式内社である。このような地の神社に何を願って九輪塔とされるものを奉納したのであろうか。奥州合戦の2年前のことである。

文治5（1189）年4月30日、義経は平泉藤原氏四代泰衡に殺害され、6月26日、忠衛は義経をめぐつて兄・泰衡と対立し、誅殺されている。

大高山神社の故地：大高山神社は大正3（1914）年から現在の柴田郡大河原町金ヶ瀬字神山にある。元々は現在地の北约2kmの同町金ヶ瀬新聞字台ノ山にあったという。元禄時代初期の火災で焼失し、台ノ山と同じ丘陵の先端部に移動し、その後、現在地に移ったとされている。先代までの鎮座地の境内には別当寺・大高山大林寺（眞言宗）もあった。旧大高山神社東方の金ヶ瀬字薬師堂には鎌倉時代以前に遡るとされる薬師堂（別當・大高山大林寺）がある。大高山神社は刈田嶺神社と同じく別号・白鳥大明神であるが、白山菊理媛も合祀している（平間・鈴木：1989）（註2）。

『藏王町史 通史編』「藏王信仰史」（小紫：1994）では、刈田郡藏王町の円田盆地はかつて柴田郡であったことがある。現在柴田郡大河原町金ヶ瀬にある大高山神社が、往古は柴田郡小紫村（現在の刈田郡藏王町小村崎）にあったとしている（註3）。「小村崎」は円田盆地の北端にあり、大高山神社は「小村崎」にある熊野神社境内の薬師堂に祀られていたという。この熊野神社は現存する。

この大高山神社「小村崎」説を積極的に評価する論考も発表されており、大高山神社は奈良時代前半頃までは「小村崎」にあったが、その後、台ノ山に移ったとする（真山：2013）。「安永風土記」には、台ノ山近くの地名として「国衝塚」「馬取沼」を載せており、「吾妻鏡」で藤原国衡最期の地とされている「芝田郡大高宮」は台ノ山にあった大高山神社とするのが通説である（亘理・中橋：1979）。今も「馬取田」の伝承や「馬取」「馬取前」「馬取山」などの地名が確認される。また、近くの「新寺」の丘陵には、

東方向かい側の丘陵・葦神山（村田町）で討たれたという藤原秀衡・泰衡の家臣・照井太郎高直の牌所とされる洞秀院の跡地もある。

台ノ山遺跡の柱状高台：金ヶ瀬新聞の丘陵上にある台ノ山遺跡からは平安時代の堅穴建物跡・掘立柱建物跡などが発見されているが、基本層から柱状高台のような土器が4点出土している（第10図）。報告書で土師器高杯脚部としている底面が回転糸切りのものである（阿部・千葉：1980）。4点の内、報告書第57図1・2・4を実見した（註4）。3点はいずれもロクロかわらけであり、柱状高台であろうと判断した。その形態は中尊寺真珠院・中尊寺金剛院・柳之御所遺跡52 S E 10などの12世紀前半の柱状高台（及川：2001）に類似している。この柱状高台は金ヶ瀬台ノ山にあったとする大高山神社に関する遺物の可能性を考えられ、奥州合戦の頃、大高山神社が台ノ山にあったとするこれまでの見解を考古学的に補強することになる。

台ノ山遺跡の建物跡：台ノ山遺跡からは桁行3間・梁間2間のほぼ同規模の平安時代の掘立柱建物跡が3棟発見されている（第10図）。3棟は調査範囲では最も標高の高い尾根筋にある小山状の高まりの上にあり、周辺から独立して目立つ場所に立地している。3棟は真北を基準とする線上に並んでいる。南側の1号建物跡は南北棟（桁行5.9m・梁間4.7m）。北側には重複する2棟があり、2号建物跡（新）は南北棟（桁行5.4m・梁間3.8m）、3号建物跡（旧）は東西棟（桁行5.4m・梁間3.9m）である。1・3号建物跡は柱穴掘り方が大きい方形で、柱痕跡も太い。この2棟の建物跡は建物方向が真北を基準とし、柱穴掘り方が大きい方形であることなど、律令時代の官衙建物跡の柱穴に類似しており、10世紀中頃までの建物跡と推定される。2号建物跡は1・3号建物跡よりは新しいが、柱穴掘り方は小さい方形である。

これらの建物跡は大高山神社や別当寺に関係する社殿跡（三間社）や仏堂跡（三間堂）などの可能性がある。官衙的な建物方向や柱穴掘り方は大高山神社が延喜式内社であることを表しているのかもしれない。現在の大高山神社の本殿は東西する梁間2間・桁行3間の三間社入母屋造であり、旧社も『安永風土記』「柴田郡南方平村風土記御用書出」には南向きの横二間・豎三間とあり、三間社であった。

3点の柱状高台の内、第57図4は2・3号建物跡が重複している場所からの出土である（註5）。この柱状高台は2号建物跡に伴う遺物と考えたいが、2号建物跡の柱穴掘り方が小さいながら方形である点が気になる。尚、遺構に伴わないが、「僧」のヘラ書きのある平安時代の土師器片も出土している。別当寺の社僧の存在を示す遺物の可能性がある。

南北棟の1・2号建物跡は東向きの建物とすると、後方となる北西の方向には青麻山があり、その延長線上には刈田岳が位置している。

国衡終焉の地：『吾妻鏡』には、阿津賀志山の合戦で敗れた平泉軍大将軍の藤原国衡（平泉藤原氏三代秀衡の子、四代泰衡の異母兄、母は信夫佐藤氏の女ともいう）は「出羽道を経て大関山を越え」とようとして、「芝田郡大高宮の辺」まで逃れてきたが、そこで討たれたとある。国衡は出羽道を通り、「大関山」（筆谷畔）を越えて出羽国に逃げようとしていたというが、逃ってきて討たれた「芝田郡大高宮」は柴田郡大河原町金ヶ瀬にある大高山神社とされており、ここは出羽道沿いの地ではない。

「大関山」を越える出羽道は蔵王町円田盆地西側の高木丘陵を通っていたと推定され、「吾妻鏡」ではこの出羽道沿いにある蔵王町の「根無藤」「四方坂」あたりが平泉軍と鎌倉軍の激戦地になったと伝える。金ヶ瀬はこの激戦地から南南東に約10km離れたところにあり、ここから「大関山」を越えて出羽国に逃れるためには、金ヶ瀬から北上して柴田郡田町を通り、そこから柴田郡川崎町を経て筆谷畔を越えるルートになる。国衡が金ヶ瀬の大高山神社あたりを通ったのは、出羽道沿いの「根無藤」「四方坂」の戦いは3名の大将軍に任せて、自分だけ激戦地から遠く離れた別ルートで逃れようとしたためと解釈すべきなのであろうか（註6）。

柱状高台の存在からも、奥州合戦の頃の大高山神社は大河原町「台ノ山」にあった可能性は強いが、大高山神社の故地は蔵王町「小村崎」であったとする説も尊重すると、「小村崎」熊野神社の墓堂堂にも「台ノ山」大高山神社の分社として「大高宮」が祀られていた可能性も考えられる。「小村崎」の熊野神社は奥大道出羽道沿いの激戦地「根無藤」「四方坂」の東方約3kmと近い。国衡は武勇の譽れ高く、一族の信望も厚い武将とされており、秀衡没後は一族团结の象徴でもあったと言われている（入間田：2016）。そのような国衡の最期の地としては根無藤・四方坂の激戦地に近い「小村崎」熊野神社の「大高宮」あたりの方がふさわしい（註7）。

[刈田郡]

刈田郡は現在の白石市と刈田郡蔵王町、七ヶ宿町の範囲である。

丈六阿弥陀仏：白石市の北隣に刈田郡蔵王町がある。蔵王町の北東部、円田盆地北部の盆地西縁にあ

る「平沢」の保昌寺に丈六阿弥陀如来坐像（宮城県指定文化財）がある。頭部や顔の表情から奥州藤原氏様式の丈六仏とされている（大矢：1999）。元々は、保昌寺北西の「平沢字丈六」にあった阿弥陀堂の本尊であったとされる。江戸時代には、丈六山無量寿院金峰安養寺（真言宗）が御堂を管理していた（藏王町史編さん委：1987）。「丈六」には阿弥陀堂の参道杉並木の一本と伝えられる推定樹齢900年の「平沢阿弥陀の杉」（宮城県指定天然記念物）がある（藏王町教委：2014）。阿弥陀堂が「丈六」のどこの場所にあったのかは不明である。ただ、「弥陀の杉」の近くにあったと考えると丘陵斜面の高台にあったことになる。また、阿弥陀堂は淨土庭園を伴っていた可能性が考えられるが、池跡などは不明であるという（註8）。このあたりは藏王最峰の伏流水が湧き出す地帯であり、園池の造成は可能な場所ではある。近くには、鎌倉五郎景政が傷を癒やしたという伝承をもつ温泉も湧き出している。

現在、阿弥陀仏のある保昌寺は「丈六」とは谷間を挟んだ南側の高台にある。ここからは、円田盆地を一望することができ、遠くに目をやると盆地東縁の愛宕山丘陵の山の端がよく見える。保昌寺の東方、ちょうど向かい側あたりの山の端は崖んで鞍部となっており、昔から村田町に抜ける峠道が通っていた。現在は東北自動車道と県道25号線が通っている。県道25号線は東の岩沼市「小川」から西の藏王町「平沢」までは山中を通る直線的な東西道である。この道は奥大道（東山道）出羽道と奥大道（東山道）本道をつなぐ間道として使用されていたものと考えられる。「丈六」に阿弥陀堂があった頃、村田町から藏王町に抜ける鞍部の峠に立つと、一面に山が開けて盆地が広がり、西方前面の丘陵高台に阿弥陀堂が見えたことであろう。阿弥陀堂の場所は道を往来する人々の視線の方向を意識して選地されたものと推定され、西方極楽浄土を演出する景観上のしかけとも考えられる。

浄土の道：この県道25号線の東端、山あいの岩沼市志賀薬師に岩沼一の古刹・岩藏寺（天台宗）がある。岩藏寺の本尊は薬師如来であるが、ここには12世紀とされる丈六阿弥陀如来像の破損仏も伝わっている（註9）。平泉藤原氏の時代、岩藏寺には淨土庭園をもつ阿弥陀堂があった可能性が考えられている（長岡：2015）。西方極楽浄土の阿弥陀如来と東方瑠璃光浄土の薬師如来を安置した京都府木津川市の淨瑠璃寺に似ている（註10）。また、県道25号線の東西の端に阿弥陀堂があったことになり、県道25号線はまるで浄土の道のようでもある（註11）。

このように見てみると、「丈六」阿弥陀堂跡東方の円田盆地内に平泉藤原氏の時代の居館の可能性を考えてみたくなるが、現在のところは不明である。ただ、その可能性はある。阿弥陀堂跡北東にある前戸内遺跡の南東部からは平安時代前半とされる仏堂のある豪族居宅が発見されている（鈴木：2015）。また、「刈田郡誌」には、保昌寺東方の新城館跡の近くに「鐘撞田」という所があり、藤原秀衡が建てた鐘楼があったとしている（刈田郡教育会：1928）。阿弥陀堂の周辺には、北東に熊野神社（境内の薬師堂が大高山神社の故地とされている）、東に八幡神社、南に白山神社、西に日吉神社がある。白山・日吉神社は、江戸時代に平沢領主・高野家が造営したものとされている。

保昌寺の南側の丘陵麓には中世とされる経塚が遺跡登録されている。ただ、現在は確認もできず詳細は不明であるという。白石市の経塚と同じような現状であるが、経塚があったものと仮定すると、藏王町の経塚も「白石市史」にある「伝經塚の地」と同じように、盆地の西方にあり、円田盆地から高木丘陵に移る地形の変換点、峠越えの山道への入口近くに位置していることになる。

刈田郡北端の要衝の地：江戸時代、高木丘陵には南北に笹谷街道が通っていた。藏王町宮で奥州街道から分かれで北上し、永野から四方峠を越え、川崎町から笠谷峠を越えて山形に至る街道である（宮城県教委：1979）。中世の大奥大道出羽道も円田盆地西側の高木丘陵を通っていた可能性が強い。この出羽道沿いの「根無藤」「一戦場」「四方峠」には史実ではないが安倍貞任・宗任や鎌倉五郎景政などが戦ったとする前九年・後三年合戦にまつわる伝説が残っている。この道が古くからの出羽に抜ける街道であり、峠に至る直前のこの地はより北方への侵入を防ぐための街道沿いの要衝の地であった。

前九年・後三年合戦の伝説が残るこの地は奥州合戦の激戦地であった。「吾妻鏡」によると、阿津賀志山の合戦後、「根無藤」に城郭を構えていた平泉軍は、「根無藤」から「四方坂」のあたりで鎌倉軍と激しく戦っている。一進一退の攻防が七度も繰り返されたが、最後は平泉軍が敗北している（永原：1976）。奥州合戦の緒戦の一つであったが、合戦のゆくえを決定づけるものであった。

刈田郡北端の円田盆地「平沢」の阿弥陀堂の存在から、平泉藤原氏がこの地に関与していたものと推定される。平泉藤原氏がこの地を重要視した理由は出羽国に至る交通上の要衝であったことが最大の要因と考えられるが、その他、金の採掘・馬の生産・温泉などとの関係も気になるところである。遠刈田温泉にあった仙台藩の金山・岩崎山金窟（藏王町教委：2014）には金壳吉次伝説がある。円田には、馬の守護神である舊前さまをイメージさせる「宋勝堂」という地名がある。また、円田の花橋館跡には信夫庄司佐藤元治の叔父河邊太郎高綱が石那坂の合戦後逃げてきて立てこもったとする伝

承がある（宮城県刈田郡教育会：1928 蔵王町史編さん委：1987）。この地と信夫佐藤氏との関係の深さを物語る伝承であろうか。また、信夫佐藤氏の本拠地である福島市飯坂も刈田郡蔵王町も温泉地である。「湯の庄司」との関わりにも注目したい。温泉は入浴だけでなく、山塩作ることもできる。円田盆地には「塩沢」などの地名もあり、近世以前からの山塩生産の可能性も考えておきたい。

「平沢」の地名：阿弥陀堂・経塚・白山神社がある蔵王町「平沢」に似た「平沢」の場所が他にもある。

1つは、福島県伊達郡桑折町大字「平沢」である。大字「平沢」は町役場の西方、平沢山の東麓にある。江戸時代末、「平沢字一本松」から「平沢寺」（へいたくじ）の刻銘のある須恵器系陶器の經筒が発見された。平沢寺の場所は不明であるが、「平沢字上城」にある白山神社の近くにあったものと推定されている（註12）。この經筒は承安元（1171）年の銘をもつ「承安銘の三経筒」の1つで、福島市飯坂の天王寺経塚の經筒（国指定重要文化財）、須賀川市日枝神社裏山の米山寺経塚の經筒（国指定重要文化財）と共に、信夫佐藤氏が関与したものと考えられている（佐藤・梅宮：1970 鈴木：1989）。桑折の平沢寺は白山神社・経塚の存在から、その近くにあった阿弥陀堂と推定され、淨土庭園が伴っていたものと考えられる。現在、白山神社の南に大きなため池があるが、このため池の場所に淨土庭園があった可能性がある。この近くを伊達郡国見町方面と福島市飯坂を結ぶ県道124号線が通っている。白山神社東方の「上郡」「下郡」あたりが伊達郡家擬定地である。尚、桑折町「平沢」の白山神社の南西、桑折町大字「成田」にも白山媛神社があり、神社の西方には「経塚森」と呼ばれる山がある。神社の東方には伊達氏祖・常陸入道念西の菩提寺・満勝寺跡とされる万正寺遺跡がある（山中：1991）。

もう1つは、埼玉県北企都巖山町「平沢」である。ここにも「平沢寺」（へいたくじ）がある。この平沢寺も丘陵東麓にある。東向きの一間四面堂と池跡が確認されており、淨土庭園をもつ天台宗の寺院とを考えられている（大澤：2007）。平沢寺の西隣には白山神社があり、神社裏に経塚がある。その1つから出土した經筒には、久安4（1148）年、畠山忠重の曾祖父らが埋納したことを示す銘が刻まれていた。近年、平沢寺から出土した12世紀中～後葉の手づくねかわらけが確認されている（石川：2016）。平沢寺の西側には推定鎌倉街道上道が通っている。

蔵王町「平沢」と同じように、2つの「平沢」にも阿弥陀堂・経塚・白山神社があり、近くを街道が通っている。阿弥陀堂（淨土庭園）・経塚・白山神社がセットとなっており、天台宗（日吉神社）とも関係があるものと考えられる。また、「平沢」の地はいずれも湧き水の豊富な土地である。「平泉」の地名についての研究があるが（伊藤：2015）、「平沢」も「平泉」と共通した意味をもつ地名かと推定する。子どもの痘の虫の妙薬として有名な白石市斎川の孫太郎虫の伝説『孫太郎虫由来伝』にも、11世紀末の丹波国「平沢寺」が登場する（飯沼：1984）。

[伊具郡]

伊具郡は阿武隈川流域の現在の角田市・伊具郡丸森町の範囲である。東隣の郡が亘理郡である。伊具郡の北半、現角田市と現丸森町の北部（阿武隈川の北側）が伊具荘、伊具郡の南半、現丸森町の南部（阿武隈川の南側）が金原保である。

伊具郡北半（伊具荘）

王家領莊園：11世紀、伊具郡は伊具十郎平永衡の支配下にあった。12世紀、この伊具郡の北半がほぼ王家領莊園である八条院領「伊具莊」となっている。この伊具莊に高藏寺阿弥陀堂がある。

高藏寺阿弥陀堂：角田市の伊具盆地西縁、阿武隈山地東麓の「西根」高倉に高藏寺阿弥陀堂がある。御堂のすぐ北側を国道113号線が通っている。御堂は東流する高倉川沿いの狭い谷あいに建てられている。東北地方では、平泉町中尊寺金色堂、いわき市白水阿弥陀堂と共に、現存する平安時代の阿弥陀堂として国指定重要文化財となっている。御堂は三間四方の一間四面堂、宝形造で、東面している。前面には淨土庭園の可能性が指摘されている場所がある。治承元（1177）年、平泉藤原氏三代秀衡の妻の発願によって建立されたものと伝えられる。丈六の阿弥陀如来坐像も国指定重要文化財である（新庄屋：1984）。

高藏寺阿弥陀堂周辺は寺前遺跡と呼ばれ、すぐ北東の国道113号線沿いの愛宕山には高藏寺経塚群がある。経塚群中の積石塚からは口縁部を欠いた常滑三筋文壺が出土している（藤沼：1978）。また、寺前遺跡「大門」地区からは秋草兔雀鏡が出土している（新庄屋：1984）。伊具莊の経塚・阿弥陀堂も刈田郡蔵王町の経塚・丈六阿弥陀堂や名取郡岩蔵寺阿弥陀堂と同じように、平地の西方にあり、平地から丘陵に移る地形の変換点、峠越えの山道の入口近くにある。高藏寺阿弥陀堂から西へ約8km、阿武隈山地を抜けて盆地に入ったすぐのところに刈田郡家跡の大畑遺跡がある。

伊具莊の安部氏：高藏寺には治承元年の修理の際の棟札が残っており、その銘に高藏寺を修理した地域の有力者の名前が記されている。注目されるのは、小旦那に安部姓の者が確認されることである。

この「安部氏」は前九年合戦の安倍氏の同族と考えられており、安倍頼良の婿であった伊具十郎平永衡の支配以来、12世紀においても、伊具荘最大の有力者は「安部氏」であったと言われている（大石：2001）。「安部氏」は伊具十郎の末裔として阿武隈川の水上交通を掌握していたものと推定される。

伊具荘の中心的居館の地：高藏寺阿弥陀堂の南東、阿武隈川西岸の自然堤防上に田町裏遺跡がある。鎌倉時代のロクロかわらけ窯が発見され、同時代の屋敷跡とされているが、遺跡北半からは渥美甕の破片やロクロかわらけ小皿など12世紀後半の遺物も出土している（手塚：1991 中村・斎藤：1994）。この田町裏遺跡の北側の「佐倉」あたりが高藏寺阿弥陀堂からちょうど東の方角になる。この場所も阿武隈川西岸の自然堤防が発達しており、阿武隈川はこの地を包むように大きく蛇行している。ここには佐倉源訪神社があり、近接する吉野城跡周辺からは渥美片口鉢・渥美甕か壺の破片が出土している（東北歴史資料館 1983 日本福祉大：1991）。ここからは白石産中世陶器や青磁なども出土していることから、「角田市史 通史編」では吉野城跡を北条得宗領の伊具郡に置かれた郡政の可能性を指摘している（伊藤：1984）。ただ、吉野城跡からは渥美片口鉢・渥美甕か壺の破片も発見されており、この地の土地利用が12世紀まで遡る可能性がある。位置・立地からも吉野城跡周辺は鎌倉時代以前の伊具荘の中心的居館の地としてもふさわしいと考える。高藏寺阿弥陀堂から東方の吉野城跡までは約8km、阿弥陀堂から西方の山を越えた大畠遺跡までとほぼ同じ距離である。

高藏寺阿弥陀堂の南東約10kmに伊具郡家・角田郡山遺跡がある。12世紀末頃の常滑甕・青白磁梅瓶破片が出土しているが、遺構は検出されていない（新庄屋：1980）。角田郡山遺跡の西方、阿武隈山中の靈峰・斗藏山には坂上田村麻呂勧請と伝える斗藏寺があり、その鎮守社である斗藏神社には稻荷・山王・白山が祀られている。伊具郡家跡周辺からも居館が発見される可能性がある。

伊具郡の阿弥陀堂と淨土庭園：「角田市の文化財」によると、伊具郡には高藏寺阿弥陀堂の他に2箇所の淨土庭園を持つ阿弥陀堂があったとしている。1つは白岩廃寺跡である（角田市岡字白岩白岩B館跡・C館跡として遺跡登録）。伊具盆地の北端、柴田郡大河原町へ通じる道の近くに位置している。もう1つは石倉廃寺跡である（伊具郡丸森町金山字石倉 遺跡登録されていない）。伊具盆地の南端、相馬にいたる街道沿いにある。阿弥陀堂跡・白山堂跡伝承地、「山王」の地名が残っている。近くには10世紀後葉の堅穴建物跡が発見された中平遺跡がある（太田：1979）。

藤原清衡の陸奥・出羽の仏国構想が伊具郡で具体的に見られるとの指摘もある（角田市教委：1979 大澤：2001・2007）。今後、発掘調査による実態の解明が待たれる。

伊具郡南半（金原保）

金原保：伊具郡の南半、現丸森町南部の阿武隈川南側の地域は金原保の東端である。ここから西方の阿武隈山地の峠を越え、福島盆地北東部の旧伊達郡保原町（現伊達市）までの地域が金原保である（伊藤：1984）。この金原保の東端に大古町遺跡がある。

大古町遺跡：阿武隈川は福島県中通り地方北端の福島盆地から北東流して阿武隈山地に入り、山中の渓谷を流れながら、丸森町「大張川張」の片倉あたりで流路を直角に曲げて東流し、丸森町中心部で伊具盆地南西端の低地に出る。ここからしばらく東に流れ、丸森町「小斎」で大きく北に屈曲し、角田市方面に流れている。大古町遺跡はこの阿武隈川が伊具盆地に流れ出るあたりにある。遺跡は丸森町中心部の東方に位置し、阿武隈川南岸の自然堤防上に立地している。川沿いの川湊が想定される場所である。遺跡のすぐ西を国道113号線が通っている。国道113号線は太平洋側の福島県相馬市から内陸部の宮城県白石市・山形県南陽市を経て日本海側の新潟県新潟市に至る。この道は古代からの東西横断道と推定される。また、遺跡西方の阿武隈山中の峠を越える県道101・102号線を通ると福島県中通り地方北東端の伊達市に至る。県道101号線は近世の角田・梁川道であり（宮城県教委：1981）、古代・中世においても阿武隈川と共に重要な交通路だった考えられる。平泉藤原氏の時代、この地域を奥大道は通っていなかったが、阿武隈川と東西横断道で奥大道にアクセスすることもできた。大古町遺跡は水陸交通の要衝の地であった。大古町遺跡の北西約17kmに大畠遺跡が位置している。

阿武隈の柳之御所：大古町遺跡からは12世紀の遺構・遺物が発見されている（伊藤：1999）。遺構には平泉柳之御所遺跡のものに類似した井戸跡や掘立柱建物跡などがあり、大溝で囲まれた居館跡と推定されている。遺物には、12世紀前半のものとして、ロクロかわらけ小皿・杯、白磁碗、白磁四耳壺、青白磁合子、青白磁小壺、12世紀後半のものとして、手づくねかわらけ大皿・小皿、ロクロかわらけ小皿、白磁碗、白磁四耳壺、青磁碗、常滑甕、壺・片口鉢がある（羽柴：2010）。手づくねかわらけは12世紀中葉以降のもので、「口縁部の器壁が膨隆し、肥厚している特徴がある。稚拙な感じの作り」で「製作に熟達していない人が製作したもの」（羽柴：2010）、「非常に退化した在地系のもの」（八重樫：2001・2016）と指摘されている。現在のところ、平泉型の手づくねかわらけが出土する遺跡の南限である。

大古町遺跡の発掘調査では涅美は確認されていないが、この周辺の「笹野田」からは涅美刻文短頸壺が見つかっている（藤沼：1977）。

平泉に特徴的な遺物である「手づくねかわらけ、白磁四耳壺、常滑三筋文壺、涅美划文壺、常滑・涅美壺」を「平泉セット」（八重樫：2001）として捉え、その出土遺跡は平泉と同じ宴会儀礼が行われていた場所、つまり平泉と親密な関係にあった場所と理解されている。大古町遺跡には出土の希な12世紀前半の白磁四耳壺と12世紀後半の手づくねかわらけがあり、「阿武隈の柳之御所」とも評価されている（羽柴：2010）。大古町遺跡の南東約3.5kmには淨土庭園を持つ阿弥陀堂跡とされる石倉庵寺跡がある。

遺跡の西方、阿武隈川沿いの「大張川張」に七郎館跡がある。この館跡は信夫庄司佐藤元治の子・七郎秀信の館であるとの伝承がある。この地域には現在も佐藤姓が多く、七郎の末裔や一族の子孫だという（丸森町文化財保護委員会：2005）。

千僧供養の保（金原保と靈山寺）：大古町遺跡は金原保の東端に位置している。この金原保の成立に関連して、藤原宗忠の日記である「中右記」の大治2（1127）年12月15日の記録が気になる。

後三年合戦後、藤原清衡は比叡山延暦寺の千僧供養の費用にあたるために、700町もの田地を開い込んで保を設定していた。これは数代の陸奥守が制止することもなく、面積を広げた結果だった。ところが、新たに受領国司となった陸奥守藤原良兼はこれを「新立庄園」にあたるとして認めなかった。制止に赴いた国司に対して、その開発にあたっていた「日吉社使」の「宮主法師」（日吉神人）が立ち向かい、武力衝突することになった。それにより、「宮主法師」二人が殺害されたり、傷つけられたりしたという（「史料大成」刊行会：1965 大石：1990 入間田：1997 佐藤：2015 小川：2015 横口：2016）。この保については平泉周辺の保とする見解と南奥州あたりの保とする見解がある。現在、その所在地は不明とされているが、陸奥守と日吉神人が衝突したということは、国府の権限が直接およぶ地域であったからこそであり、宮城県中央部から福島県にあたった保の可能性が強いと考える。当時、宮城県中央部から福島県の地域で、着任した陸奥守と武力衝突するくらいの力のある日吉神人が関与する可能性があるのは伊達郡靈山寺ではないだろうか（註13）。延暦寺の千僧供養のための保であり、「北の比叡山」と称された靈山寺の近くに立てた保であった可能性を考えてみたい。このように考えると、靈山の北西に隣接した金原保と靈山の南西に隣接した小手保が千僧供養のための保の候補地として挙げられる（註14）。金原保が藤原清衡による千僧供養のための保であれば、大古町遺跡は平泉藤原氏一族の直轄地にある遺跡ということになる。金原保の現地管理には亘理郡の比爪藤原氏や信夫莊の信夫庄司佐藤氏の関与が想定される。当時、延暦寺勢力は日本海側の海上交通を掌握していた。靈山寺は阿武隈川に近く、太平洋に直接通じる場所にある。比爪藤原氏・信夫佐藤氏は靈山寺を介して海上交通の列島ネットワークにつながっていたものと考えられる。

〔亘理郡〕

亘理郡は太平洋沿岸の現在の亘理郡亘理町・山元町の範囲である。

亘十郎清綱：12世紀の亘理郡は「亘十郎清綱」藤原清綱が所領している。清綱は11世紀に亘理郡司であった亘理權大夫藤原經清の孫であり、平泉藤原氏初代清衡の子、二代基衡の弟である。平泉藤原氏の一族である比（樋）爪藤原氏の始祖であり、比爪俊衡の父である。清綱の娘（比爪俊衡の妹）は信夫庄司佐藤元治に嫁いでおり、その子が平泉藤原氏三代秀衡に遣わされ源義経に従った佐藤繼信・忠信の兄弟とされている（入間田：2007・2016）。

比爪藤原氏は阿武隈川河口・湊のある宮城県南東部の亘理郡を直轄地とし、さらに婚姻関係を通じて阿武隈川中流域にある福島県中通り北端部の信夫郡・莊とも強い関係で結ばれていたことがわかる。亘理郡と信夫郡・莊は阿武隈川でつながっており、阿武隈川中下流域は比爪藤原氏と信夫佐藤氏の支配下にあったものと考えられる。角田高藏寺棟札に見られるように、当時の伊具莊の有力者である安部氏もこれらと深く結びついていたのであろう。阿武隈川流域は平泉藤原氏一族・郎従によって掌握されていた。当時、阿武隈川の北にある名取川の水運は「泰衡一方後見」である名取熊野別当が掌握し、熊野勢による太平洋海上交通につながっていた（小川・高橋：2000）。比爪藤原氏・信夫佐藤氏は名取熊野別当とも連携して、太平洋海上交通網の一翼を担っていたものと推定される。

〔信夫郡〕

信夫莊：信夫郡は福島県中通り北端の福島盆地とその周縁部にある。10世紀前半頃、信夫郡の北半部を分離して伊達郡が置かれたとされる。その後、阿武隈川東側には金原保・小手保がつくられ、12世紀中頃には信夫郡は信夫莊となったものと考えられる。信夫莊はほぼ現在の福島市、伊達郡は現在の伊達市の一部、伊達郡桑折町・国見町、金原保は阿武隈川東側の現在の伊達市の一部、小手保は現

在の伊達郡川俣町を中心としたあたりである。江戸時代、福島は南北の奥州街道と東西の米沢街道が交差し、奥州街道と並行して流れていた阿武隈川が太平洋に向かって離れていく場所であるため、水運の起点でもあった。福島盆地は古くから水陸交通の要衝である。

信夫佐藤氏：平安時代末期、信夫郡・信夫莊を拠点とし、伊達郡・金原保・小手保を支配下においていたのが信夫佐藤氏である。信夫佐藤氏は平泉藤原氏初代清衡以来の平泉藤原氏郎従の家である。ただ、平泉藤原氏の「後見」であり、また「乳母」を出す家でもあったことから、家来というよりは家族に近い存在であったとも言われ、平泉藤原氏一族との間には婚姻関係も結んでいた（入間田：2007）。

12世紀半ば、陸奥国司藤原師綱が検地を行い、平泉藤原氏二代基衡の不正を暴こうとして合戦に発展した時、「信夫郡司大庄司季春」はみずから首を差すことによって事態の解決を図ったという。季春は基衡にとって、平泉藤原氏に「代々伝わるる後見」であり、自分の「乳母」の子であった。季春の母が基衡の乳母ということになる。季春と基衡の二人は同じ乳を飲んで兄弟同然に育ったのであり、藤原師綱との合戦についての説話はその結びつきの強さを表している。この事件の後、信夫莊が成立したとされている（入間田：2007）。

奥州合戦時の信夫佐藤氏については、「吾妻鏡」に「泰衡郎從信夫佐藤庄司（又号湯庄司。是繼信忠信等父也）」とある。先に触れたように、信夫庄司佐藤元治は佐藤繼信・忠信兄弟の父、妻は藤原清綱の娘（比爪後衛の妹）である。信夫佐藤氏の女には基衡の乳母、秀衡の妻、その子国衡・忠衡の妻もいたという。源義経もそのような関係があったといわれる（註15）。信夫佐藤氏と平泉藤原氏とは特別に親密な関係をもっていたとされている（入間田：2007）。

石那坂の合戦と信夫佐藤氏：奥州合戦では、信夫庄司佐藤元治は大将としてその一族とともに石那（名）坂で戦った。対する鎌倉軍は常陸入道念西（伊達氏の始祖）の子息らであった。さらに、信夫佐藤氏一族は福島盆地北端の阿津賀志山の合戦でも、一族と関係の深い総大将藤原国衡の下で戦っている。この福島盆地の2つの合戦が奥州合戦の緒戦であったが、いずれも必死の抗戦むなし、平泉軍は鎌倉軍に敗北している。「吾妻鏡」では石那坂の戦いで敗れた元治以下の佐藤一族18人の首を阿津賀志山の経岡にさらしたとしているが、同じく「吾妻鏡」では「囚人」佐藤庄司が名取郡司・熊野別当と共に、特に許されて本所にかえされたと記す。佐藤元治は捕虜として存命していたようである。

信夫佐藤氏の居館：信夫庄司佐藤元治は「湯の庄司」とも記されており、温泉地として有名な福島市「飯坂」を本拠地にしていたとされている。「飯坂」は福島盆地北西部の丘陵麓にある。現在、ここから丘陵沿いに東に向かうと伊達郡家擬定地の桑折町に至り、そこから北上して阿津賀志山を越えると宮城県白石市、北西に向かい栗子峠を越えると山形県米沢市、摺上川に沿って北西に向かい鳩峰峠を越えると山形県高畠町、東方に向かい、伊達市から雲山を過ぎると相馬市に至る。また、摺上川を下り、さらに阿武隈川を下ると宮城県丸森町・角田市を経て河口のある亘理町に至る。伊達市から阿武隈山中の峠を越えて丸森町に着く。「飯坂」は福島盆地の北西隅にあるが、古代・中世においても水陸交通の要衝の地であったと考えられる。

江戸時代後期の史料では、飯坂館ノ山の大鳥城を信夫佐藤氏の居城と伝えている。その周囲には天王寺・八幡寺・飯坂寺・医王寺・湯野庵寺など配置されてあったという。ただ、発掘調査の結果、大鳥城跡は南北朝から室町時代の山城であり、12世紀の信夫佐藤氏の居館ではないとされている。

天王寺経塚：「飯坂」には12世紀の遺物が出土している場所が3カ所ある。1カ所は天王寺経塚である。天王寺裏山にあった天王寺経塚からは承安元（1171）年の銘をもつ「承安銘の三経筒」の1つとされる須恵器系陶器の経筒が出土している。経筒の銘から、信夫佐藤氏が大檀主として施入したものと考えられている（佐藤・梅宮：1970 銘木：1989）。

天王寺（臨済宗）は寺伝では真言密教の古刹という。寺には聖德太子作と伝える毘沙門天がある。四天王の内、北方を守護するのが毘沙門天であり、信夫莊の北端の地にはふさわしい（註16）。

近くに経塚のある天王寺は立地の類似から浄土庭園をもつ天台宗系の阿弥陀堂であった可能性が考えられる。天王寺山門にお住まいの方に伺ったところ、今までに寺の場所が四回変わっている。最古の寺の故地は現在の寺の南側にある墓地の南部だという。その場所は周辺より一段高い平場となつており、平場南端は崖で、その下には祠がある。祠のある場所からは今も清水が湧き出でており、その祠を地元では「寂光庵」と呼んでいるそうだ。天台宗の「寂光土」（寂光淨土）に由来しているのかもしれない。清水の流れる出る場所には池跡のような窪地は認識できなかったが、現在山門下の宅地となっている場所はかつては湿地だったという。平泉町毛越寺・蔵王町丈六阿弥陀堂・岩沼市岩藏寺も湧き水のある場所に造成されたものであり、天王寺にも園池があった可能性は否定できない。

飯坂窯跡群：あと2カ所は中世陶器の窯跡である。温泉街の北方、摺上川北側の丘陵南斜面に毘沙

門平窯跡、温泉街の西方、館ノ山北側の赤川沿い南斜面に赤川窯跡がある。2つの窯跡を合わせて飯坂窯跡群とも呼ばれている。12世紀後半の須恵器系陶器の窯跡で、毘沙門平窯から赤川窯への変遷が考えられている(吉岡:1994)。石川県珠洲窯に代表される須恵器系の中世陶器の窯跡は日本海沿岸に多く、太平洋側では珍しい。

飯坂窯の生産には信夫佐藤氏の関与が考えられ、荘園経営の一環として窯業を導入した可能性がある。ただ、飯坂窯の製品は福島市内では若干発見されているが、伊達郡では確認されていないという(菅野:2003)。また、宗教具を主体とした注文生産に近いものであった可能性も指摘されており(飯村:1992)、一般的の消費地には流通しにくかったものとされている。その飯坂窯跡群の毘沙門平窯跡の製品が刈田郡家跡である白石市大畠遺跡「堂場前」地内から、常滑三筋文蓋・龍泉窯系青磁碗・皿・白磁碗などと共に出土している(日下・佐藤:2008)(註17)。大畠遺跡内のこの場所には平泉藤原氏の時代の居館があったものと推定される。さらに、式内社・刈田嶺神社の近くにある藏王町宮の持長寺遺跡からも、満美甕・龍泉窯系青磁碗と共に出土している(黒川:1980・八重樫:2001)。大畠遺跡の製品は大甕片・持長寺遺跡は大甕片である。信夫佐藤氏が奥大道出羽道沿いの地域や阿武隈川流域の地域と関係が深いことから推定すると、飯坂窯跡群の製品は宮城県南部の刈田郡・柴田郡・伊具郡・亘理郡からは出土する可能性がある。さらに、奥州合戦で共に平泉藤原氏側に与した名取郡司・熊野別当の支配する名取郡からも出土するかもしれない。名取郡にある仙台市王ノ壇遺跡からは須恵器系陶器(装飾壺・片口鉢)が出土している(小川・高橋:2000)。新潟県や秋田県などの日本海諸窯の製品と推定されているが、飯坂窯跡群の製品の可能性も考えてみる必要がある。

毘沙門平窯跡の地名「毘沙門平」はかつてこの地にあった毘沙門堂に由来するといふ。この毘沙門堂の本尊が現在天王寺にある毘沙門天であるとされ、信夫佐藤氏が天王寺(経塚・経筒)と毘沙門平窯(飯坂窯)の両者に関与していることが分かる。毘沙門平窯跡の南方・飯坂町湯野の西原庵寺跡(平安時代)の南東には「白山」「山坊」「山坊前」などの地名がある。日本海側の須恵器系陶器の生産と流通は白山神人・日吉神人の活動とも関係しているとされている。信夫佐藤氏は日本海沿岸海上交通を掌握する延暦寺勢力と連携するためにも、出羽国とも密接な関係をつくり、白山信仰・山王信仰と共に須恵器系陶器の生産を取り入れた可能性がある。

出羽国内陸部の置賜郡は信夫莊に隣接しているが、平泉藤原氏は置賜郡「屋代莊」・最上郡「大曾禪莊」などの拠閥家に寄進した莊園を直接支配していた。また、信夫庄司佐藤元治の弟・恒治の子である「田川三郎信治」の「田川」は平泉藤原氏四代泰衡郎従の田河太郎行文が領主であった出羽国田川郡(現在の鶴岡市あたり)の「田川」と推定されており、信夫佐藤氏は平泉藤原氏と共に出羽国日本海沿岸まで勢力を伸ばしていた可能性が指摘されている(小林:2001)。

居館推定地: 信夫佐藤氏の居館は天王寺経塚・毘沙門平窯跡・赤川窯跡の近くにあったと考える。飯坂温泉の東方・揖上川対岸の湯野には「白山」の地名があり、白山神社があつたと考えられる。「吾妻鏡」では、平泉の東方を守護する鎮守社は白山社・日吉社である。飯坂温泉の南方・館ノ山南麓の中野には東屋国神社(式内社)がある。東屋国神社の祭神は素戔鳴尊であり、八坂神社の祭神と同じである。平泉では八坂神社は南方守護である。飯坂も平泉と同じように鎮守社を配置していたのかもしれない。

飯坂と平泉の地理的環境は類似しているところがあり、寺院や経塚と居館の位置・立地なども似ていた可能性がある。平泉は北上川の西側、飯坂は揖上川の西側にある。平泉は中尊寺の南東に柳之御所遺跡がある。飯坂の天王寺を平泉の中尊寺に見立てると、信夫佐藤氏の居館は天王寺の南東と推定される。現在の天王寺は東を向いており、現参道も東に延びているが、地元の方に確認すると、もともとの参道は現在も残る天王寺から南東方向に延びている道だといふ。この道を赤川を越えて南東に延長すると、八幡寺北側の小道につながり、更に延長すると十綱橋に至る坂道に通じる。この天王寺から十綱橋に至る南東ライン沿いに信夫佐藤氏の居館があつたのではないかと推定する。現地踏査を踏まえ、河川・河岸段丘・丘陵などの地形も考慮すると、居館の第一候補地は東を揖上川、西を天王寺裏山から南に延びる丘陵、南を赤川に囲まれた地域、第二候補地は第一候補地の南東で、北を赤川、東を揖上川、西を大鳥城跡のある館ノ山、南を館ノ山とそこから延びる段丘崖で区切られた地域である。館ノ山と段丘崖の南方には小川が東流している。

第二候補地で、天王寺を中尊寺に、館ノ山山頂を平泉の金鶏山に見立てると、柳之御所遺跡にあたる信夫佐藤氏の居館推定地は飯坂小学校・八幡寺・八幡神社あたりとなる(註18)。飯坂小学校と八幡寺・八幡神社の北側、神社の東側は段丘崖となっている。八幡神社の社伝では、養和元(1181)年、信夫庄司佐藤元治が豈前国宇佐八幡宮を奉還して社殿を建立したとされ、八幡寺は寿永2(1183)年に元治が建立した信夫佐藤氏の祈願寺で、八幡神社の別当寺と伝える(佐藤・梅宮:1970)。八幡寺は天正

11(1583)年、八幡神社は宝永7(1710)年、館ノ山にあったものを現在地に再建したと言う。

[出羽国]

揖間家領莊園：刈田郡の西隣「置賜郡」の半分は「屋代莊」などの莊園が、柴田郡の西隣「最上郡」の大部分は「大曾禰莊」などの莊園があった。12世紀中頃、揖間家藤原頼長と平泉藤原氏二代基衡が5つの莊園の年貢増減の争いをしているが、「屋代莊」・「大曾禰莊」はそのうちの2つである。これらの莊園は平泉藤原氏が揖間家に寄進した揖間家領莊園で、平泉藤原氏が現地管理にあたっていた。出羽国南半の内陸部の盆地は平泉藤原氏の実質的な支配下にあったと考えられている（伊藤：1998）。置賜郡・最上郡は和銅5(712)年の出羽建国以前は陸奥国の一部であり、隣郡の信夫郡・刈田郡・柴田郡とは古来から密接な関係があった地域である。

安久津八幡神社：白石盆地の西縁、経塚があったとされる地域から、国道113号線で西に向かい二井宿峠を越えると置賜盆地に至る。置賜盆地は屋代莊にある。この置賜盆地の東縁、高畠町の国道113号線（七ヶ宿街道）沿いに安久津八幡神社がある。三方を山に囲まれた立地がいわき市白水阿弥陀堂に類似しており、淨土莊園をもつ寺院であったとの指摘もある（大澤：2001・2007）。白石盆地西縁の経塚、置賜盆地東縁の阿弥陀堂は盆地と丘陵の境の道沿いにあったことになるが、いずれも現地踏査と発掘調査による実態解明が待たれる。

2. 刈田郡と奥州合戦（石那坂の合戦、阿津賀志山の合戦、根無藤・四方坂の合戦）

奥州合戦は刈田郡とも深く関わっている。その緒戦とされる三日間の合戦について整理する。

[石那坂の合戦]

石那坂の合戦は奥州合戦の緒戦とされている。石那坂の地は推定奥大道沿いの地名から、福島市平石の「石那（名）坂」とするのが從来からの通説であるが、信夫佐藤氏の本拠地「飯坂」とする説、伊達市（旧伊達郡保原町）富成の石名坂とする説、国見町説などもある（佐藤・梅宮：1970）。

(通説) 福島盆地南端の石那坂：通説の福島市平石字石名坂は福島盆地の南端にある。この地域の奥大道は東北本線・東北新幹線・東北自動道とほぼ平行するルートを通っていたものと推定されており、奥大道が丘陵地の高いところから福島盆地の低いところに下ってくるあたりが石名坂になる。「吾妻鏡」には「石那坂の上に陣す。涅を掘り、逢隈河の水をその中に懸け入れ、柵を引き、石弓を張り、討手を相待つ」とある。素直に考えて、南側から進んでくる鎌倉軍と対戦するためには、陣は北側の高台に構築し、陣の南側に堀を掘削することになるが、福島市石名坂の地形は「吾妻鏡」の記述には合わない。南からの鎌倉軍を待ち構えて防御するにはふさわしい土地ではない。

通説の新解釈：近年、この疑問に答えるような福島市石名坂説の新たな解釈が示されている（小林：2001）。新石名坂説では、合戦の場所を石名坂の地名のある場所から約2km南の浅川沿いの谷地に設定している。ここは「閑屋」の地名が残るところで、浅川は奥大道を分断するように道に直行して阿武隈川に流れている。この谷地に掘を掘って阿武隈川の水を引き入れ、柵を造れば、北側の段丘崖の上から鎌倉軍を迎撃つことができるという理解である。この説は「吾妻鏡」に記された石那坂の特徴と大きな矛盾はなく、高い評価がなされている（入間田：2007）。しかし、これも仮説の一つである。

新解釈への疑問：新石名坂説への疑問が4つある。①阿武隈川と浅川の流れる谷地の比高差である。10mも比高差があり、堀を掘って谷地に水を入れることは可能だったのだろうか（阿津賀志山防星の堀も水を引き入れることができたのは阿武隈川沿いだけだったと思われるが）。②鎌倉軍の常陸入道念西の子らが「伊達郡澤原」から迂回して裏手に回り奇襲攻撃をしたことになっている。「伊達郡澤原」は從来通り「福島市佐原」に比定しているが、浅川の谷から「福島市佐原」までは直線距離にして約13kmである。福島盆地南西端縁の佐原方面まで行って迂回して戻ってきたとしたら、その距離は25km以上になる。離れすぎてはいいのか。③福島市石名坂は阿津賀志山から南に約23kmも離れている。福島盆地の南端と北端である。「吾妻鏡」には阿津賀志山の合戦の場面で石那坂の合戦についての記述がある。福島市石名坂説では、これは間違いであり、地理的に南に位置する石那坂の合戦が阿津賀志山の合戦以前にあったものと解釈されている。新説もこの從来からの解釈を踏襲している。「吾妻鏡」では、なぜ石那坂の合戦の記述が阿津賀志山の合戦と一緒に記述されているのか。本当に、阿津賀志山の合戦以前のことを混同して記述していると理解してよいのか。疑問である。④新石名坂説の浅川は丘陵地内の谷地である。「吾妻鏡」の「石那坂の上に陣す」という記述は南側の低地から進軍してくる鎌倉軍を北側の高台に陣した平泉軍が待ち構えるというイメージである。浅川の谷地からそのイメージは生まれてこない。

現状では、「石那坂」「澤原」の地名考証を中心とした文献史学的アプローチによる福島市石名坂説

が最も妥当な見解だと理解している。ただ、上記のような疑問もあり、何となくしつくりしない。そこで、福島盆地周辺の空中写真を見ながら、以下のような歴史地理学的な仮説を考えてみた。

(仮説) 福島盆地北端の石那坂：阿武隈川は福島盆地南半では盆地東端を流れており、飯坂から流れてくる摺上川との合流地点から北はほぼ盆地の中央部を流れ、北東端で阿武隈山中に入っていく。つまり、福島盆地南半では阿武隈川の西側だけが低地となっているが、北半では阿武隈川の両側に低地が広がっていることになる。福島盆地内では奥大通は常に阿武隈川の西側を通っており、通説の石那坂の合戦の場、阿津賀志山の合戦の場は奥大通沿いにある。しかし、盆地北半では阿武隈川の東側にも低地は広がっており、奥大通沿いではないものの、阿武隈川や峠の山道（近世の角田・梁川道）を通ると伊具郡（現丸森町・角田市）、亘理郡に通じる地域である。先に、阿武隈川流域の金原保・伊具莊・亘理郡は比爪藤原氏と信夫佐藤氏の強い影響下にあったものと考えた。阿武隈川は太平洋に至り、湊から列島各地につながる。この水上交通の権益を守る必要が平泉藤原氏一族にはあったはずである。

『吾妻鏡』では、奥州合戦時の伊具郡・亘理郡については、東海道軍が「達隈の湊を渡」って多賀国府に到着したこと以外には書いていないが、兼倉軍が阿津賀志山・石那坂の合戦の後、阿武隈川を下ることや、峠の山道を越えて伊具郡・柴田郡に入ることは可能だったであろう。『吾妻鏡』にある源賴朝が藤原国衡の首実検をした柴田郡船宿は奥大通の宿とされているが、船宿は阿武隈川と白石川の合流地点の北岸の場所にある。福島盆地北端の合戦場から船宿に至るには奥大通などの陸路だけではなく阿武隈川を舟で下るルートも想定される。平泉に至る経路は奥大通だけではなかったのであり、宮城・福島県境ではこの阿武隈川と越えの山道もまた平泉側にとって重要な交通路であったはずである。平泉軍は阿武隈川西側の奥大通沿いだけを防備し、阿武隈川東側の守りは必要としなかったのであろうか。

阿武隈川が伊達市から県境を越えて丸森町に入ったあたりの狭隘部に「潜り岩」がある。『安永風土記』では、この岩は、前九年合戦の際、安倍貞任がこの場所で阿武隈川をせき止め、信達地方を湖にして源義家の大軍を防いだとしている。この地は前九年合戦の戦闘地ではなく、史実ではないものの、南から進軍してくる大きな敵を防いだ伝説が残っている。前九年合戦で、安倍氏と源氏が戦ったとする伝説は刈田郡蔵王町にも残っており、その伝説の地である根無蘿あたりは奥州合戦時には実際の激戦地であった。前九年合戦の伝説のある場所は奥州合戦の史実の地であることに注意したい。

阿武隈川東側の要害：阿津賀志山防壁は阿武隈川の西側（伊達郡）に築かれたものであるが、阿武隈川の東側（金原保）にも同じような防壁（堀や土塁）が築かれたのではないかと考えてみたい。阿津賀志山防壁東端の対岸は現在の伊達市梁川町である。阿津賀志山防壁を東端からさらに阿武隈川の東側にまで延長してみると、ほぼそのライン上に広瀬川がある。広瀬川は一級河川で、阿武隈山地から西流して阿武隈川と合流しているが、その合流地点あたりには一級河川の塩野川も流れ込んでおり、この地帯は昔からの氾濫地帯として有名である。広瀬川の北側は阿武隈山地が西北西に張り出しており、南側は広瀬川の浸食により岩肌の露出する断崖、丘陵の西側は段丘崖となっている。南崖には中世の磨崖仏「岩地藏」がある。西側の段丘崖は梁川城跡の西端から北方の梁川八幡神社の西端まで続いている、北端は阿武隈川に達している。南に広瀬川、西に阿武隈川が流れ、両河川の内側は南が丘陵の断崖、西が段丘崖の急斜面である。南側の崖の高さは10 m以上あり、福島盆地の北東隅から盆地全体を眼下に見渡すことができる。西側の段丘崖も広瀬川から阿武隈川まで続いている、南からの侵入を防ぐ天然の要害のような場所である（伊達市教委：2016）。この場所が文治5年奥州合戦の石那坂の合戦の地だったのではないかと考える。

梁川の「石の坂」：3河川が合流する湿地帯、そのあたりに堀を掘って阿武隈川の水を引き入れ、柵をつくって、盆地を見渡せる南側の崖や西側の急斜面の上から石弓を引いて待ち構える。そんなイメージができる場所である。この周辺で「石の坂」や「伊達郡澤原」の地名は確認できないが、石那（名）坂は「石の坂」の意であり、丘陵や段丘の崖が特徴的なこの場所を表現しているのではないだろうか。東北地方には石名坂の地名が各地にあり、その地形的特徴が地名になったものと推定される。宮城県内では、仙台市広瀬川北岸の若林区石名坂、七北田川北岸の泉区市名坂などが知られるが、これも段丘崖の坂にある地名である。特に、仙台市広瀬川は『吾妻鏡』にも登場する河川であるが、梁川町の広瀬川と同じ名称である。広瀬川も地形的特徴を表した河川名であろうが、仙台には広瀬川と石名坂がセットになって地名として残っている。伊達市梁川もそのようであったろうか。

また、梁川は特徴的な赤い石を産出するところでもある。伊達市周辺地域の神社の灯籠・参道石碑・鳥居などに使われる赤紫色の凝灰岩がある。この石は地元では赤石（赤滝石）と呼ばれている。梁川町北東部の丘陵は全体が赤石で、かつて「八幡」「白根」「富野」あたりでは露頭が見られたという。「八

幡」 「白根」「富野」は広瀬川以北の西側の段丘崖あたりの地名である。すると、この段丘崖は赤い岩の露出する崖だったことになる。赤が特徴的で目立つ石の坂、それ故に石を強調した「石那坂」と呼んだのかもしれない(註19)。

梁川の阿弥陀堂と浄土庭園:『梁川町史第1卷第4編中世』にある「八幡神社由緒」によると、梁川八幡神社(福島県指定史跡・名勝)は平安時代中期に石清水八幡宮を勧請して創建したもので、承安2(1172)年には、平泉藤原氏三代秀衡が信夫庄司佐藤元治に神社の再建を命じ、さらに社殿の脇に三重塔も建てさせたと伝える。また、八幡神社の地名が「堂庭」であることから、平泉藤原氏の時代、浄土庭園をもつ阿弥陀堂があった可能性が指摘されている(浅野:1996)。近年、梁川八幡神社を含む堂庭遺跡の発掘調査で、池跡が発見されている(梁川町教委:2002)。その池跡から出土したロクロかわらけの中には、その後の検討で12世紀後半の可能性があるものも含んでいるという(註20)。類似したロクロかわらけは堂庭遺跡西側の下位段丘にある江越遺跡からも出土している(伊達市教委:2015)。

前述したように、かわらけと日吉(日枝)神社・白山神社・浄土庭園・阿弥陀堂とは密接な関係が推定されることから、梁川八幡神社周辺にも日吉神社・白山神社・阿弥陀堂・浄土庭園がセットで存在していた可能性が考えられる。これらの宗教施設の造営には、社伝からも信夫佐藤氏の関与を考えられ、この場所がその一族の激戦の地としてふさわしいように思われる。先に、梁川は延暦寺の千僧供養のために靈山寺近くに立てた金原保の一部と推定した。天台宗・日吉神社に関連する宗教施設があるのは当然のこととも考えられる。奥州合戦に、靈山寺・山王社の衆徒・神人も平泉方として参加していたことを記す文献史料は発見されないだろうか。現在、堂庭地区東方の白根地区に日吉神社があり、堂庭地区北東の丸森に抜ける街道が通る丘陵地「梁川町舟生」には「字白山」の地名がある。

確認されている（石本・日下部・寺島：1980）。「防壁」と「本陣」の工事に要した労働力は約半年間とすると、延べ40万人と推定され、伊達・信夫・刈田の成年男子5,000人を総動員したとしても、80日を要する大土木工事だったとされている（小林：1979・1989）。平泉方は刈田郡蔵王町根無藤にも「城郭」を築いており、刈田郡の人々は郡の南隣と郡北端の両方の防備施設づくりに駆り出されたものと考えられる（根無藤「城郭」については柴田郡の人々も動員されたか？）。『吾妻鏡』には阿津賀志山「防壁」「本陣」のある伊達郡の郡司と根無藤「城郭」のある刈田郡の郡司は登場しない。これは阿津賀志山「防壁」「本陣」と根無藤「城郭」が平泉藤原氏の主導によって造られたことを物語っているのであろうか。

これらの工事の時期は春から夏の農繁期と重なり、動員された人々はやむなく田畠の耕作を止めて、防壁・城郭づくりに出かけなければならなかっただろう。また、合戦の時期は秋の収穫間近な頃である。阿津賀志山の合戦における両軍の実数は平泉軍二万騎・鎌倉軍一万数千騎と推定されているが（入間田：1983）、それらが刈田郡の南隣と北端で合戦をした。刈田郡は全城が戦場であったと言える。田畠はどういう状況になつたのであろうか。想像に難くない。阿津賀志山を抜けると白石盆地に入る。奥大道は盆地西線の奥山脈沿いを通つたと推定されるが、東山道の舊駿駅があったとされる盆地南部の奥大道には関や宿があった可能性があり、また、奥大道路側の低地には弥生時代から続く水田地帯が広がっていた。阿津賀志山の合戦後、逃げる平泉軍、追いかける鎌倉軍。奥大道路の関・宿は破壊され、田んぼの稲穂も踏み倒されたのであろうか。この白石盆地南東部あたりの地名を「三澤」という。

石那坂、阿津賀志山、根無藤・四方坂の合戦での平泉軍の主要メンバーはどのような人々だったのであろうか。『吾妻鏡』からひろってみる。石那坂の合戦は佐藤元治以下の信夫佐藤氏一族である。阿津賀志山の合戦は大將軍泰衡異母兄国衡、信夫佐藤氏一族の金剛別当秀綱・下須房太郎秀方、泰衡部從奥六郡の伴藤八である。根無藤・四方坂の合戦は大將軍が泰衡部從の金十郎・勾當八・赤田次郎である。平泉藤原氏が緒戦の地と決めた極めて重要なこの地域に配置された軍は平泉最強の精銳部隊だったと考えられるが、それは信夫佐藤氏一族・平泉藤原氏一族・平泉藤原氏直轄地の郎従を中心とした軍團であったようだ（七海：2014・2015）。

防壁や城郭の構築に領民を動員されたであろう伊達郡・刈田郡・柴田郡の郡司は信夫佐藤氏や名取郡司・熊野別当のように平泉方として戦つたのであろうか。『吾妻鏡』には記述がない。ただ、阿津賀志山の合戦後、源頼朝が「船迫宿」に逗留したことに関して、柴田郡の郡名を名字としていることから、柴田郡の一族と推定される芝田次郎は合戦前に鎌倉方に參陣の意志を表明し、領内の「船迫宿」に源頼朝を迎えた可能性が指摘されている（大石：1999）。頼朝は、それ以前に、阿津賀志山のあたりの「国見駅・旅館・国見宿」にも滞在しており、伊達郡司も柴田郡と同様であったものと推測される。本来は平泉方であった名取郡以南の柴田・刈田・伊達郡の郡司は合戦前から鎌倉方に恭順の意を表明していたかもしれない。『吾妻鏡』に、信夫佐藤氏や名取郡司のように鎌倉方に捕えられて「囚人」となつたとする記述がないことからも、そのように考えられる。

このような状況の中、刈田郡で唯一『吾妻鏡』に登場する人物がいる。阿津賀志山の合戦、根無藤・四方坂の合戦で鎌倉方に与して大活躍したと評価されている「三澤安藤氏」である。

3. 刈田郡の三澤安藤氏

『吾妻鏡』に登場する安藤次・三澤安藤四郎について整理する。

【安藤次・三澤安藤四郎】

『吾妻鏡』8月10日の条、阿津賀志山の合戦で、「安藤次をもって山の案内者となし」とあり、また、根無藤・四方坂の合戦の記述の後、「この所の合戦の無為なるは、ひとへに三澤安藤四郎の兵略にあるものなり」とある。「安藤次」は、鎌倉軍が阿津賀志山防壁を越えても、なかなか国衙の大木戸の本陣が落ちないので、9日の夜、鎌倉方の7名を「山案内」し、ひそかに山道を通つて国衙本陣の裏山に登り、背後から本陣に奇襲をかけて、平泉方を絶崩れにしている。「三澤安藤四郎」らは根無藤・四方坂の合戦で、平泉方の大將軍である泰衡部從の金十郎・勾當八・赤田次郎らを追いかけ、根無藤と四方坂の間での激戦を制し、金十郎を討ち、勾當八・赤田次郎らを捕虜にしている。

「安藤次」「三澤安藤四郎」はそれぞれの合戦の勝敗を決定づける重要な役割を果たしている。

【白石市三沢の地理的・歴史的環境】

鎌倉方として、阿津賀志山の合戦、根無藤・四方坂の合戦で大活躍した「安藤次」「三澤安藤四郎」は白石市「三澤」を本拠地とする安藤氏の一族と考えられている（大石：1988）。この「三澤」は白石市南東部一帯の地名（現在は「大鷹沢三沢」）であり、阿津賀志山のすぐ背後（北側）に位置する地域である。「大鷹沢三沢」は白石盆地南東部に位置し、北・東・南の三方を阿武隈山地に囲まれ、西に開

いた地域である。東は阿武隈山中で角田市（伊具莊）に接し、南東は阿武隈山中で丸森町（金原保）に接し、伊達市梁川町に近接している。阿武隈山地を越えるが、阿武隈川までは直線距離で約7kmと近い。「三澤安藤氏」は「大鷹沢三沢」を中心として、白石市南部の「斎川」「越河」を含む白石盆地の南半部を掌握していたものと考えられ、阿津賀志山の近くまで「三澤安藤氏」の勢力範囲だったと推定される。

刈田郡家跡の大畠遺跡・本郷遺跡がある白石盆地北東部は飛鳥時代以降の遺跡が中心である。飛鳥時代以前の遺跡は「三澤」のある盆地南東部に集中しており、古代・中世まで継続して遺跡が確認されている。条里制推定遺跡もあり、弥生時代以降は継続的に水田として開発された地域である。周縁の丘陵上には古墳時代中期後半から終末期の古墳群があり、低地からは奈良三彩陶枕なども発見されている。ただ、発掘調査が少なく、この地域の詳細は不明な点が多い。12世紀後半の「三澤安藤氏」についても、考古学からアプローチできる資料はほとんどない。わずかに、「三澤安藤氏」の勢力範囲内である斎が川中流域の梅田遺跡から常滑三筋文壺の破片が出土しているだけである。

「三澤」に含まれる「大平坂谷」には現在も日吉神社がある。また、「三沢字五丁目」にはかつて白山社や庄子合戸敷「庄子」は「庄司」「莊司」の可能性がある)があったという（宮城県刈田郡教育会：1928）。「大平坂谷」は「三澤」南部、「三沢字五丁目」は「三澤」東部にある。「三沢字五丁目」背後の阿武隈山地には南北朝時代に南朝方の北畠頼信が藩在したという三沢城跡がある。往古、「三沢字五丁目」には、天台寺院の大聖寺（現在、三沢字落合にある淨土宗寺院）があったと伝える（宮城県刈田郡教育会：1928）。このように「三澤」東部から南部の地域には、天台寺院と白山神社と日吉神社があつたことが確認できる。「三澤」北部には熊野神社がある。

「三澤」には現在も「宮在家」「西在家」「志在家」「宿」「熊野堂」「大師堂」「和尚堂」「大館」「大門」「塔ノ入」「堂伝」「山王下」「山王下沖」などの中世的な地名が残っている。

〔三澤の安藤氏〕

「安藤次」「三澤安藤四郎」は平泉藤原氏の支配下にあった刈田郡三澤に住む安藤氏の一族と考えられている。「三澤安藤氏」は阿津賀志山の背後の地の在地領主である。どのような領主だったのであろうか。「安藤次」「三澤安藤四郎」は「吾妻鏡」に刈田郡で唯一登場する人物であり、刈田郡司の可能性もある。「吾妻鏡」に登場する郡司は「名取郡司」や「芝田次郎」など郡名を名字としており、これらは郡司の大領と推定される。「三澤安藤氏」は郡名の刈田を名字としていないことからすると、古くからの地元の豪族ではなく、郡司の大領ではないのかもしれないが、郡司の少領などであった可能性は残る。12世紀の伊具莊の実力者「安部氏」のような存在であったと考えられる。

伊具十郎平永衡・亘理權大夫藤原經清は安倍氏の娘婿であった。「三澤安藤氏」も安倍氏を祖としている。伊具十郎・亘理權大夫は阿武隈川下流域から太平洋沿岸を支配して水上交通を掌握した。「三澤安藤氏」の先祖は内陸部の刈田郡に入り込んだ。それは、内陸部の東山道（奥大道）の要衝の地を掌握し、安倍氏同族と安藤氏一族の勢力を拡大しようとしたものと理解することもできる。「三澤安藤氏」の祖先は同族・一族の組織的な闘争により戦略的に刈田郡に送り込まれた可能性があり、同族・一族のネットワークは奥六郡の安倍氏につながっていたものと考えられる。隣郡の歴史的環境から推定すると、「三澤安藤氏」祖先の刈田郡へ土着は伊具十郎・亘理權大夫と同時期頃と考えたい。

奥州合戦前夜、阿津賀志山防壁構築の情報は鎌倉方にすでに入っており、合戦前から、防壁背後地の「三澤安藤氏」には鎌倉幕府からの働きかけがあったものと考えられる。南奥の白河あたりの武士團には、秀衡が没する前の文治2（1186）年ころから働きかけがあったことが指摘されている（大石：1990）。「三澤安藤氏」にも合戦直前ではなく、早くからの働きかけがあった可能性もある。刈田郡の南隅と北端が合戦の地に決められ、領民が強制的に防壁や城郭の工事に驅り出されたにもかかわらず、いくさをするのは平泉藤原氏一族とその郎従の部隊である。刈田郡の領主層にとっては、合戦によって、土地・人・物・交通・経済活動・日常生活を一方的に奪われるだけである。合戦になんでも平泉藤原氏方としての活躍の場もなく、平泉方が合戦に勝利したとしても、本領を安堵されるかもわからない。「三澤安藤氏」は鎌倉軍の侵攻という一族存亡の危機に際して、平泉藤原氏を離れ、鎌倉方に与する道を選んだものと考えられる。

「吾妻鏡」では、奥州合戦に際して、鎌倉方に与した元奥州武士團の大方は鎌倉方に恭順の意を表して抵抗しなかった者か鎌倉方に形式的に参陣した者である。合戦中に鎌倉方の案内者となったり、平泉方と積極的に戦ったのは「三澤安藤氏」以外に見当たらない。「安藤次」は阿津賀志山の合戦を決定づける山案内をしている。「三澤安藤四郎」は根無藤・四方坂の合戦で平泉方を追い詰めて徹底的に戦っている。「吾妻鏡」は「この所の合戦無為なるは、ひとえに三澤安藤四郎の兵略にあるものなり」と、高く評価している。根無藤・四方坂の合戦で、「三澤安藤四郎」が泰衡郎従の三名の大將軍と激しく戦つ

たのは、領地・領民を勝手に使われるなどの自分の領地に関わる権益を平泉方に奪われた怒りに起因していたのかもしれない。鎌倉方からは所領安堵以外の恩賞も約束されていたのであろうか。

〔安藤氏と三澤安藤氏〕

「安藤氏」は「安倍氏」を祖とする「奥羽の地つきの勢力を代表する存在」(大石:2001)であり、元々は牧畜や漁業などの非農業生産を基盤として、商業や河川・海の水上交通などに深い関わりをもっていた人々とされている。ただ、阿津賀志山の合戦で「安藤次」が山案内をしていることから、山野を活動の場とし、陸上交通にも関わる深い人々もいたことがわかる(入間田:1986 大石:2001 七海:2015)。安藤氏一族には海の民も山の民もいたが、「非農業生産を基盤とし、商業・交通に深い関わりをもつ安藤氏は、そもそも在地性が希薄であり、通常の在地領主のような開発の本領を持つことがなかった」(大石:2001)との指摘がある。

「三澤安藤氏」もそうであったろうか。「三澤」は弥生時代からの水田地帯であり、水稻耕作を基本とした領地経営が可能な地域である。ただ、領地が福島との県境の辺にあり、領内には古代東山道の駕籠駅家や駅馬場である駕籠駒場も含まれていたと推定されるところから、「三澤安藤氏」は農業だけではなく、関や宿、さらには馬などによる陸上交通にも関係していた可能性がある。

戦国時代ではあるが、伊達宗祺が陸奥国守護職に補任された際、將軍足利義稙らに獻じた良馬の中に、刈田郡「宮」と「大町」の馬も入っていた。「宮」は刈田峯神社のある現刈田郡巣王町宮、「大町」は現白石市大鷹沢大町で、かつての「三澤」北部の地名である(入間田:1990)。戦国時代、「三澤」は馬産地であったことがわかる。刈田郡の馬匹生産はさらに古代まで遡る可能性もある。

「三澤安藤氏」は関や宿の管理・運営、馬の生産、馬・車などによる運送業にも関わっていた可能性が考えられる。

伊具荘の実力者「安部氏」は「三澤安藤氏」の同族である。お互いに同族意識があった可能性が指摘されており、同族のネットワークを持っていたものと考えられている(大石:2001)。「三澤」は伊具荘、阿武隈川にも近い。「三澤安藤氏」は伊具荘「安部氏」による水上交通と連携した陸上交通を担当していた可能性がある。同族ネットワークによる地域運送業界の独占であろうか。

〔靈山寺と三澤安藤氏〕

刈田郡の南東、伊達郡と宇多郡との境の阿武隈山中にそり立つのが靈山(国指定史跡名勝)である。ここにあった靈山寺は貞觀元(859)年、悲覚大師円仁の開基と伝えられる天台寺院である。山王21社を祀り、3,600坊の衆徒を有し、北の比叡山と称され、東北山岳仏教文化の中心であったといわれる(梅宮:1977 鈴木:1989)。

『靈山寺山王縁起』では、往古は伊達郡・宇多郡・刈田郡の三郡に寺領があったという。靈山寺の寺領とは比叡山延暦寺の寺領であり、つまりは延暦寺の莊園であった。また、靈山寺は比叡山の護法神である山王社(日吉神社・日枝神社)を祀っている。寺領は山王社の社領でもあった。「縁起」には、信夫佐藤氏が安元年中(1175~77年)に大石・泉原・瀬成田・牛坂・山戸田・飯田・石田の七郷(現伊達市保原町あたりか)を寄進したとある(梅宮:1977)。前述したように、靈山寺北西の金原保と南西の小手保は延暦寺の千僧供養のために藤原清衡によって立てられた保の可能性を指摘した。靈山寺の寺領が伊達郡・宇多郡・刈田郡の三郡にあるのに、靈山に隣接する金原保と小手保に寺領がないのは、すでに千僧供養のための保として成立していたからなのかもしれない。靈山寺・山王社は周辺の二保と三郡の一部を比叡山延暦寺の莊園として現地管理にあたっていたものと考えられる。

寺伝にある刈田郡の靈山寺領がどの辺だったのかは不明であるが、靈山寺に近い方だとすると、刈田郡南部となる。すると、その寺領には白石盆地南半部の「三澤安藤氏」の支配地が含まれていた可能性がある。「三澤」地区の白石市大平坂谷には現在も「字山王下」「字山王下沖」の地名があり、そこには日吉神社がある(社伝では応仁元(1467)年勅請という)。前述した阿武隈川狭隘部の「潜り岩」近くの河床には「猿跳石」と名付けられた石がある。『安永風土記』には、この石は、靈山の山王さんと「潜り岩」の窟の山王さんが親しくなったので、その使いの猿が阿武隈川を往来した時の飛び石であるとの伝説をのせている。「潜り岩」の山王窟は丸森町耕野の阿武隈川沿いにあるが、その北方の阿武隈山中の「耕野字日吉」にも日吉神社がある。この「耕野字日吉」は「三澤」の日吉神社がある大平坂谷からは南方の峰を越えてすぐの場所である。靈山から阿武隈川沿いの山王窟、そこから阿武隈山中の日吉神社へ、そして「三澤」の日吉神社へと山王信仰の道がつながっているようである。「三澤」は靈山寺の寺領(山王社の社領)だった可能性が強いのではないだろうか。

畿内においては、日吉神人による経済活動が顕著で、「正長の土一揆」で有名な近江坂本の馬借も日吉大社の日吉神人であった(稲葉:1993)。南奥の靈山寺・山王社においても、日吉大社から派遣され

た本所神人と在地の散在（在国）神人がいて、耕地開発の他、在地に即したさまざまな経済活動も行っていたものと考えられる。先に、「三澤安藤氏」は闇や宿の管理・運営、馬の生産、馬・車などによる運送業にも関わっていた可能性を指摘した。靈山寺・山王社の在国神人であった可能性も踏まえると、刈田郡靈山寺領の荘官を兼務しながら、他にもなんらかの商工業や日吉神人に特徴的な高利貸業などの経済活動に関与していた可能性も考えてみたい。

〔鎌倉時代の国御家人・三澤氏〕

『吾妻鏡』で高く評価された「三澤安藤氏」は、鎌倉時代には陸奥国の国御家人として在地での地位を保障されている。建治元（1275）年、鎌倉幕府は京都六条八幡宮の造営に関する費用を御家人に対して割り当てるリストを作っている。このリストには全国469名の御家人が列挙されているが、陸奥国の国御家人の中に、「三澤二郎」の名がある。奥州合戦から86年後、三澤安藤氏一族の子孫が三澤氏を名のる国御家人になっていたことが確認される（七海：2015）。

鎌倉時代前半期の刈田郡地頭は中条氏である、後半期の刈田郡地頭は北条氏である（亘理・中橋1979・岡田：1994）。国御家人の三澤氏は刈田郡地頭にはなっていない。鎌倉時代前半期の三澤氏は中条氏の地頭代官、後半期の「三澤二郎」は北条得宗家の刈田郡政所の代官だったと考えられる。

鎌倉時代後半期には、白石窯での中世陶器の生産が開始されるが、窯は「三澤」に近い。窯のある白石市「白川大卒都婆」は「三澤」に隣接する北東の山中にある。白石窯中世陶器の生産と流通（保管・運送・販売）には北条氏と三澤氏が深く関わっていたものと推定される。

VI まとめ

1. 白石市大畑遺跡で発見された第1焼土遺構はその特徴から「かわらけ窯跡」であると考えられる。
 - ①「かわらけ窯跡」は大畑遺跡の南端（陸奥国刈田郡衙の南縁）に位置している。大畑遺跡の東には阿武隈川に合流する白石川の支流の斎が川が北流しており、「かわらけ窯跡」は斎が川西岸の自然堤防上に立地している。窯跡は斎が川の西方、約120mにある。
 - ②大畑遺跡の南端地域（陸奥国刈田郡衙の南縁）では古代の土器焼成に関連すると推定される土坑が数基発見されている。本報告の第1焼土遺構（かわらけ窯跡）も同一地域にある。
2. 出土した手づくねかわらけは第1焼土遺構（かわらけ窯跡）で焼成されたものと考えられる。
3. 手づくねかわらけには大皿・小皿・耳皿がある。平泉型手づくねかわらけであり、その特徴から、製作年代は平泉型手づくねかわらけの最終段階である12世紀後葉と考えられる。
耳皿は希少であり、特殊なかわらけである。特別な人物が参加した特別な宴会が想定される。
4. 第1焼土遺構（かわらけ窯跡）で生産された手づくねかわらけは他の遺跡からの出土は確認されていない。現在、その消費地は不明であるが、その候補地は本窯跡の近くにある。第1焼土遺構（かわらけ窯跡）が発見された地点の北東約300mにある【大畑遺跡H19①地点】である。
屋敷内の南北区画溝から、飯坂毘沙門平窯産須恵器系陶器大甕、常滑産三筋文壺、龍泉窯系青磁碗・皿、白磁碗・皿などの12世紀後葉の遺物が出土している。この場所は刈田郡司クラスの有力者の居館跡であったと推定され、手づくねかわらけによる宴会儀礼が行われていた可能性が十分に考えられる。
5. 平泉型手づくねかわらけの南限は宮城県最南端の2遺跡である。阿武隈川沿いは伊具郡丸森町大古町遺跡、奥大道沿いは白石市大畑遺跡となる。今のところ阿津賀志山の南では確認されていないが、今後、信夫佐藤氏の支配した福島盆地周辺から手づくねかわらけが出土する可能性は濃厚である。
近年、関東地方においても平泉藤原氏時代の手づくねかわらけが確認されており、南奥の幹線道路沿いや主要河川沿いからは出土する可能性がある。天台系の阿弥陀堂・日吉神社・白山神社との関連にも注意したい。

註 1 : 「奥羽觀蹟聞老志」(享保 4 年)、「封内風土記」(安永元年)には泉三郎寄進の「鉄塔」とある。「安永風土記」(安永年間)に初めて「鉄九輪塔」とされ、「鉄九輪塔高さ七尺・幅二尺五寸・切石高さ三尺五寸・幅二尺四寸」と補足説明されている。現在、九輪塔は欠損し、九輪塔の塔身とされる部分のみを燈籠の一部の火袋として復元したことになっている。現在、塔身とされる方形の部分の内面は全面水色になっている。防腐剤を塗布した可能性がある。奥壁には仏像のレリーフがあるが、仏像は全面接着で付いており、水色ではない。仏像周囲には接着剤らしきものが付着している。剥落防止なのか、一度剥がれ落ちたものを貼り直したのかは分からぬ。この仏像についての江戸時代の記録はないが、「大河原町史諸史編」(昭和 59 年)では大日如来像としている。大高山神社別当寺の大林寺が真言宗だからであろうか。

壁面の仏像は名取熊野郡智神社の懸仏(御正体)のようである(東北歴史博物館: 2016)。商食して判然としない部分もあるが、この仏像は頭に宝冠を戴き、合掌している。左肩から右脇下に条帛が通り、蓮弁の上で結跏趺坐した足に裳が架かっているように見える。宝冠は五智宝冠と見られる。五智宝冠は大日如来像に見られるが、大日如来の印相は合掌ではない。五智宝冠は虚空菩薩にも見られるが、この印相も合掌ではない。宝冠を付け、合掌し、条帛・裳などの衣を身につけている姿は虚空菩薩以外の菩薩像に見られることがある。名取熊野郡智神社の懸仏にも「合掌菩薩形坐像」懸仏がある。合掌している菩薩像であれば、普賢菩薩・勢至菩薩・千手觀音菩薩が考えられるが、五智宝冠のような宝冠を戴き、合掌している類例としては奈良国立博物館所蔵の「菩薩懸仏」(収藏品番号 1374-0)が良く似ている。これは普賢菩薩を表すものとされている。また、本例の結跏趺坐している足の上を、よく見ると、足に重ねた裳ではなく、膝の上に置いた手のように見える。この手は宝鉢を持つ手の可能性があり、合掌手と宝鉢手があることから、光背の脇手は確認されないが、千手觀音菩薩像を表したものかもしれない。このように、大日如来像とも、いずれかの菩薩像とも確定することはできなかつた。あるいは、如來と菩薩の両方を一体で表現した像なのかもしれない。五重塔などの相輪の九輪は五智如來と四菩薩を表すものともいわれる。それとの関連はあるのだろうか。

尚、普賢菩薩は天台宗の根本經典である法華經の守護者である。また、日吉大社の上七社の摂社・三宮神社祭神の本地は普賢菩薩である。日吉大社の摂社には白山姫神社があり、大高山神社にも白山薦理媛が合祀されている。また、「大高山神社縁起」には、弘法大師が觀音像を祀るために一字を建てたのが別当寺・大林寺の始まりであるとしている(大河原町史編委会: 1984)。さらに、千手觀音菩薩は紀州熊野郡智大社の本地であり、藏王薦現の三尊の一つでもある。それらとの関連にも注意したい。

九輪塔とはどのような塔なのでしょうか。現存する日本の古代・中世の鉄製仏塔に類例はない(中野: 2001)。塔身とされる方形の部分の上面は円形に開いている。この上に九輪部分などが付いているのである。また、塔身とされる部分の三面は横子忍風のつくり(正面に 12、左右に 6 の方形孔)であり、燈籠の火袋のようでもある。塔の形・塔の構造法・鉄材質・製作年代などを含めて、「鉄九輪塔」についての総合的な検査に期待したい。

註 2 : 大高山神社の沿革・社殿・合祀・摂社・別当寺などについて、宮司・早坂正寿氏に多くのご教示をいただいた。

註 3 : 「奥羽觀蹟聞老志」、「封内風土記」にも「大高山神社の往古の宮跡が小紫村にあり、「大高宮」という」とある。

註 4 : 台ノ山遺跡出土遺物の実見に際して、東北歴史博物館の相原淳一氏に遺物の出土地点や大高山神社・出羽道などについてご教示をいただいた。

註 5 : 台ノ山遺跡の報告書第 57 図 4 の柱状高台だけ、出土地点と出土層位が分かっており、「J-K-35-2」とあった。J・K 列と 35 列の交差するグリッドの 2 層出土である。この場所には 2・3 号建物跡があり、柱状高台は 2 号建物跡に伴う可能性がある。また、破片集計表を見ると、3 棟の建物跡周辺からは赤焼土器底部が出土している。これらはクロカワカラの底部かもしれない。

註 6 : 岡田清一氏は「国衡が逃れて大高宮辺に到着したのも、阿津賀志山の背後に位置する三沢地区が「三沢安藤四郎」に抑えられていたため、阿武隈川沿いに逃れた結果であろう」としている(岡田: 1994)。

註 7 : 「小村崎」熊野神社薦堂の西方近くには丈六阿弥陀堂がある。熊野神社薦堂の薦師如来は東方珊瑚光淨土の教主であり、熊野神社本社が熊野権現(熊野三山の祭神)を祀っており、西方極樂淨土・東方珊瑚光淨土・南方福陀淨土と一緒に祀る淨土でもある。激戦地に近く、丈六阿弥陀堂と一体化している熊野神社「大高宮」の方を国衡最期の地と考えてみたくなる。銀九輪塔とされるものも熊野神社「大高宮」にあったものだろうか。

大高山神社のあたりで討たれた藤原國衡の胴体は出羽道沿いの麻王町「曲竹」に葬られたという。ここに祠を建て、白九頭龍神社として祀られている。「曲竹」は「台ノ山」の大高山神社よりは「小村崎」の大高山神社の故地とされる熊野神社に近い。

註 8 : 蔵王町丈六阿弥陀堂と経縁について、蔵王町教育委員会・鈴木雅氏にご教示をいただいた。

註 9 : 岩沼市岩藏寺の仏像について、岩沼市教育委員会・川又隆史氏にご教示をいただいた。

註 10 : 京都府淨瑠璃寺のように阿弥陀堂の東方に薦堂がある配置は刈田郡・柴田郡でも確認される。白石市深谷禮讚寺阿弥陀堂と北東の薦堂、蔵王町丈六阿弥陀堂と北東の熊野神社薦堂などである。

註 11 : 岩藏寺・丈六阿弥陀堂跡・刈田嶺神社奥宮(刈田岳)はほぼ同じ緯度で東西に並んでいる。偶然の一致であろうか。太陽が東丸から昇り、真西に沈む日は春分の日と秋分の日、つまり、彼岸の中日である。日想観の法要と関係あるのだろうか。平泉では、無量光院西方の金鶏山に沈む夕日を拝み、日想観が行なわれていたとの指摘がある(菅野: 1992)。金鶏山の東麓には金峯山藏王薦現堂跡と伝える花立隠寺跡があるが、刈田岳山頂には藏王薦現が祀った刈田嶺神社奥宮がある。

註 12 : 桑折町平沢寺について、桑折町まちづくり推進課・井沼千秋氏にご教示をいただいた。

註 13 : 雲山寺には日吉大社から派遣された「本所神人」だけではなく、雲山寺・山王社の「散在神人・在國神人」もいたものと推定される。

註 14 : 小手保は、夷州合戦後、源賴朝によって奈良興福寺に莊園として寄進されている(庄司・小林・菅田: 2006)。

平泉藤原氏による延暦寺の千僧供養のため保と推定した小手保が興福寺に寄進されており、鎌倉幕府の「北嶺」延暦寺と「南

都 興福寺への対応の違いを象徴しているようで興味深い。

註 15：源義経の正室は武蔵の河越重頼の娘であるが、義経の従者であった佐藤繼信の妻も河越重頼の娘だったという（飯沼：1984）。繼信の母は北爪俊衡の妹であり、北爪藤原氏・信夫佐藤氏・河越氏は婚姻関係でつながっていた。

河越館跡では 12 世紀中頃とされる手づくねかわらけが出土しており、平泉とはほぼ同時期に手づくねかわらけが使われ始めたようである（石川：2016）。平泉藤原氏は長年にわたる駿馬の輸送を通じて、馬や牧に関わる各地とのネットワークをもっていたとされており（八重樫・高橋：2016）、北爪藤原氏・信夫佐藤氏・河越氏もそのネットワークに関係していたのであろうか。尚、河越重頼は新日吉社領河越荘の莊官でもあり、かわらけの広がりには日吉神社・天台宗の教義拡大とも何らかの関係があるのかもしれない。信夫荘で唯一 12 世紀後半のロクロかわらけを出土している福島市宮代館跡にも近くに日枝神社がある（堀江：1998）。また、前述した阿弥陀堂・淨土庭園・經塚・日吉神社・白山神社のセットの広がりもここに間に開通する可能性がある。

註 16：平泉藤原氏も毘沙門天を信仰しており、平泉の達谷宿毘沙門堂には七宝伽藍を建立している。また、仙台市若林区石名坂の北にある満福寺（真言宗）の毘沙門天像は寺伝では安元元（1175～1176）年に秀衡が運慶に彫らせたものとされている。毘沙門天信仰は、その発祥が平安時代の鞍馬寺とされており、源義経との関連も気になるところである。中尊寺の白山神社には義経の持仏・毘沙門天が安置されていたといふ。

註 17：毘沙門天窟跡出土陶器の実際に関しては、福島市振興公社文化財調査室・音野崇之氏にご配慮とご教示をいただいた。持参した大畠遺跡の須恵器系陶器が毘沙門天窟跡の販品であることを確認した。

註 18：信夫佐藤氏の居館跡擬定地については、既に、羽柴直人氏によって、大鳥城跡のある篠ノ山を「信仰対象の山」とし、その東方の上川との間の市街地に居館があったとする説が提示されている（羽柴：2010）。その居館擬定地として図示されている場所は本報告で推定した飯坂小学校・八幡寺・八幡神社の南東の地である。

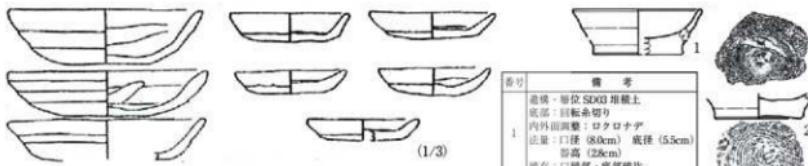
註 19：脱稿後、大石直正氏の石郡坂の地名に関連する興味深く論考がすでに発表されていたことを知った（『奥州藤原氏の時代』吉川弘文館：2001）。仙台市石名坂・市坂の名とも取り上げられている。次のように記している。

「石郡坂という地名は「石なす坂」で、石がごろごろしている坂の意味」と考えられ、「河岸段丘の段丘崖にかかる坂もそのような坂の一つ」であり、「交通路上の境界をなすところにある」「河岸段丘の段丘崖を利用し、段丘崖にかかる交通路をおさえられるような形で設けられた城である」。さらに、このような城は前九年合戦の安倍氏以来の伝統的な城壁であるとしている。ただし、石郡坂の合戦の地は福島市石名坂説を探っている。

註 20：伊達市教育委員会・石本弘氏（白石市文化財保護委員）のご教示による。また、梁川城から梁川八幡神社周辺の実地踏査に際しては現地を案内していただいた。

註 21：梁川城は伊達氏 11 代持宗から 14 代植宗（室町～戦国時代）の本拠地であるが、その築城は 3 代義広（1185～1256 年）による鎌倉時代と伝えられる。発掘調査で最古の遺構は 13 世紀のものと推定されている。

註 22：念西の子息らが、太平洋沿岸に近い「阿武隈川東側の推定石郡坂」の合戦に配されたのは、海道軍が常陸國・下総國の武士団を中心としていたことと関係はないのだろうか。さらに、「吾妻鏡」文治 5（1189）年 7 月 19 日の条に、賴朝率いる大手軍の「鎌倉出御より御供の輩」144 名が挙げられているが、その中に念西の子、常陸次郎為重・同三郎資綱の名はあるが、石郡坂の合戦で「殊に命を忘れて攻め戦」った常陸君者為宗と同四郎為家の名はない。単純に大手軍「御供」のリストに記載されなかっただけと解釈すべきものなのかもしれないが、為宗・為家は東海道軍の「常陸・下総の勇士等」の一員として出発し、宇多郡あたりから阿武隈山地を越えて大手軍の為重・資綱と合流し、「梁川の石郡坂」の合戦に参戦した可能性はないのだろうか。



第 8 図 大古町遺跡の手づくねかわらけ
(羽柴：2010 より)

番号	備考
1	造塊・堆位 SD03 堆積土 底部・回転み切り 内外面調整：ロクロナデ 正量：口径 (8.0cm) 底径 (5.5cm) 厚高 (2.6cm) 残存：口縁部・底部破片
2	造塊・堆位 SD03 堆積土 底部・回転み切り 内外面調整：ロクロナデ 正量：底径 5.4cm 厚高 (1.2cm) 残存：底部のみ

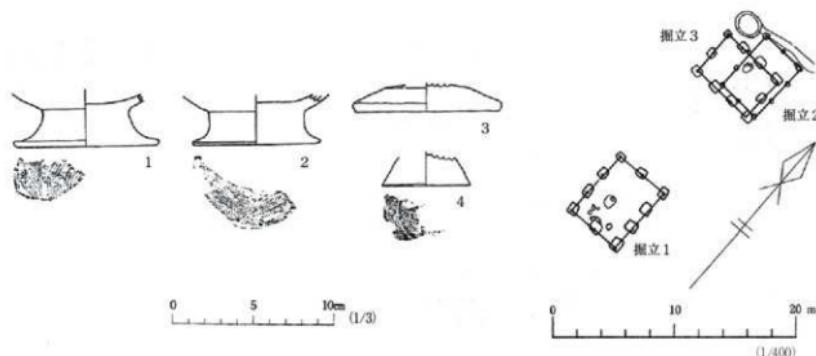
第 9 図 大畠遺跡 H19①地点 出土のロクロ土器

引用・参考文献（発行年順）

- 宮城県刈田郡教育会（1928）：『刈田郡誌』
- 仙台叢書刊行会（1929）：『奥羽觀蹟聞老志』仙台叢書
- 宮城県史編さん委員会（1954）：『安永風土記』『宮城県史 23 「風土記」資料篇 1』宮城県
増補史料大成刊行会（1965）：『中右記 五』「増補 史料大成」第13巻
- 志賀 泰治（1971）：『愛田遺跡』『白石市文化財調査報告書』第9集 白石市教育委員会
- 佐藤堅治郎・梅宮 茂（1970）：『第二編 古代（通史編 1）』『福島市史』第1巻 福島市史編纂委員会 福島市
- 宝文堂（1975）：『封内郷土記』『復刻版仙台叢書』第1巻
- 永原 康二 監修（1976）：『全譯 吾妻鏡 第二卷』新人物往来社
- 梅宮 茂（1977）：『東北藍山と修驗道 藍山・安達太良山とその信仰』『山岳宗教史研究叢書』7 名著出版
- 片倉 信光・中橋 朝吾・後藤 隆彦（1976）：『考古資料叢』『白石市史 別巻』白石市史編さん委員会 白石市
- 藤沼 邦彦（1977）：『宮城県出土の中世陶器について』『東北歴史資料館研究紀要』第3巻 東北歴史資料館
- 藤沼 邦彦（1978）：『中世陶器の紹介』『東北歴史資料館研究紀要』第4巻 東北歴史資料館
- 中橋 朝吾・清野俊太郎（1978）：『觀音崎道路調査報告書』『白石市文化財調査報告書』第18集 白石市教育委員会
- 大石 直正（1978）：『中世の黎明』『中世奥羽の世界』東京大学出版会
- 入間田宣夫（1978）：『蔵王廟宇と奥羽両国』『中世奥羽の世界』東京大学出版会
- 亘理 稔智・中橋 朝吾（1979）：『第二章 古代 第三章 中世』『白石市史 1 通史編』白石市史編さん委員会 白石市
- 宮城県教育委員会（1979）：『歴史の道調査報告書』並木街道・花山街道・羽田街道・奥州街道』『宮城県文化財調査報告書』第60集
- 小林 清治（1979）：『奥州合戦と二重塙』『郷土の研究』第10号 国見町郷土史研究会
- 角田市教育委員会（1979）：『造構・造物』『角田市の文化史』第9集 角田市教育委員会
- 太田 昭夫（1979）：『宮城県文化財発掘調査報告書 中平3年』『宮城県文化財調査報告書』第57集 宮城県教育委員会
- 真山 情（1979）：『花山寺跡』『花山村文化財調査報告書』第1集 花山村教育委員会
- 服部 敬史・福田 健司（1979）：『南多摩窯跡群出土の須恵器とその編年』『神奈川考古』第6号
- 石本 弘・下田部善巳・寺島 文隆（1980）：『伊達西部地区道路発掘調査報告書』『福島県文化財調査報告書』第82集 福島県教育委員会
- 宮地 純一（1980）：『蔵王町の文化財 神社仏閣編』蔵王町教育委員会
- 新庄屋元春（1980）：『角田市山道跡』『角田市文化財調査報告書』第3集 角田市教育委員会
- 黒川 利司（1980）：『東北自動車道調査報告書』IV・久・持長寺道跡』『宮城県文化財調査報告書』第71集 宮城県教育委員会
- 阿部 博志・千葉 宗久（1980）：『東北新幹線開通関係遺跡調査報告書 II 台ノ山道跡』『宮城県文化財調査報告書』第62集 宮城県教育委員会
- 加藤 道男（1981）：『東北自動車道調査報告書 V 植田前道路』『宮城県文化財調査報告書』第81集 宮城県教育委員会
- 宮城県教育委員会（1981）：『歴史の道調査報告書』角田道（梁川道）・白石・角田道・相馬道はか』『宮城県文化財調査報告書』第80集
- 入間田宣夫（1983）：『文治五年奥州合戦と阿津賀志山二重塙』『郷土の研究』第13号 国見町郷土史研究会
- 東北歴史資料館（1983）：『東北の中世陶器』東北歴史資料館
- 大河原町史編纂委員会（1984）：『大河原町史 諸史編』大河原町
- 風間 静綱（1984）：『地名の研究』『白石市史 3 の (2) 特別史 (下)』白石市史編さん委員会 白石市
- 飯沼 実治（1984）：『白石地方の伝承』『白石市史 3 の (2) 特別史 (下)』白石市史編さん委員会 白石市
- 新庄屋元春（1984）：『古代伊具郡と角田』『角田市史 1 通史編 上』角田市史編さん委員会 角田市
- 伊藤 信（1984）：『歴史の時代』『角田市史 1 通史編 上』角田市史編さん委員会 角田市
- 後藤 秀一（1984）：『名生熊道跡 IV-玉造横標跡推定地』『喜賀城関連道路発掘調査報告書』第9集 宮城県多賀城跡調査研究所
- 佐々木博・寺地 浩夫（1985）：『白石市瓦山道跡の古瓦』『赤い本』第2号 赤い本同人会
- 入間田宣夫（1986）：『郷土の駿馬』『東北古代史の研究』吉川弘文館
- 蔵王町史編さん委員会（1987）：『第二編 古代資料 第三編 中世資料 第六編 蔵王山信仰史料』『蔵王町史 資料編 I』蔵王町
- 大塚 徳郎・竹内 利美 監修（1987）：『宮城県の地名』『日本歴史地名大系 4巻』平凡社
- 大石 直正（1988）：『阿津賀志山合戦と安藤氏』『東北中世史研究会会報』創刊号 東北中世史研究会
- 平間 喜栄・鈴木吉之助（1989）：『大河原町の文化めぐりガイド』(文化財シリーズ) 大河原町教育委員会
- 鈴木 啓（1989）：『国説 福島県の歴史 先史・古代』『国説 日本の歴史』7 河出書房
- 小林 清治（1989）：『国説 福島県の歴史 中世』『国説 日本の歴史』7 河出書房
- 大石 直正（1989）：『奥州藤原氏と阿津賀志山合戦』『郷土の研究』第19号 国見町郷土史研究会
- 入間田宣夫（1990）：『陰宗の貢馬』『北日本中世史の研究』吉川弘文館
- 大石 直正（1990）：『陰宗の貢馬』『東北文化研究所紀要』32 東北学院大学東北文化研究所
- 長井致太郎 監修（1990）：『山形県の地名』『日本歴史地名大系 6巻』平凡社
- 手塚 均（1991）：『田町裏遺跡 第1次 はか』『角田市文化財調査報告書』第7集 角田市教育委員会
- 清野俊太郎（1991）：『大畑道跡発掘調査概要』『第18回古代城柵官道跡検討会資料集』古代城柵官道跡検討会
- 中山 雄志（1991）：『下北山道跡調査報告書』『桑折町埋蔵文化財調査報告書』8 桑折町教育委員会
- 日本福祉大学知多半島総合研究所（1991）『知多半島の歴史と現在』No3
- 菅野 寛成（1992）：『都市平泉の宗教的構造 思想と方位による無量光院論』『奥州藤原氏と柳之御所跡』吉川弘文館
- 飯村 均（1992）：『福島県の中世窯業』『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会
- 遠藤 勝（1993）：『藤原清衡 一平泉開府と中尊寺建立一』『歴史談本』6月号 新人物往来社

- 大石 直正（1993）：「地域性と交通」『岩波講座 日本国史 第7巻 中世1』岩波書店
- 入間田宣夫（1993）：「馬と鉄」『岩波講座 日本国史 第7巻 中世1』岩波書店
- 稲葉 伸道（1993）：「神人・寄人」『岩波講座 日本国史 第7巻 中世1』岩波書店
- 大石 直正（1994）：「国指定史跡阿津賀志山防風保存管理計画報告書－阿津賀志山防風の特質」『国見町文化財報告書』第9号
- 小川 淳一（1994）：「第二編 古代」『藏王町史 通史編』藏王町史編さん委員会 藏王町
- 岡田 清一（1994）：「第三編 中世」『藏王町史 通史編』藏王町史編さん委員会 藏王町
- 小紫 敏（1994）：「特別編 藏王信仰史」『藏王町史 通史編』藏王町史編さん委員会 藏王町
- 平川 新（1994）：「特別編 白鳥伝説のなぞ」『藏王町史 通史編』藏王町史編さん委員会 藏王町
- 柳沢 和明（1994）：「東北の施釉陶器—跡を中心に—」『古代の土器研究 律令の土器様式の西・東3』古代の土器研究会
- 吉岡 康暢（1994）：「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 中村 方彦・斎藤 彰（1994）：「田舎道跡」『角田市文化財調査報告書』第14集 角田市教育委員会
- 八鶴 伸明（1995）：「大字道路ほか」『宮城県文化財調査報告書』第168集 宮城県教育委員会
- 村田 晃一（1995）：「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号 福島県考古学会
- 菊地 達夫・早川 英紀（1996）：「一本杉窯跡」『宮城県文化財調査報告書』第172集 宮城県教育委員会
- 井上 雅孝（1996）：「岩手県における古代末期から中世前期の土器様相」『中世土器の基礎研究』X-1 日本中世土器研究会
- 浅野 二郎（1996）：「第4編 梁川の中世遺跡 二 梁川亀岡八幡神社石窟」『梁川町史 第1巻 通史編』梁川町史編纂委員会
- 入間田宣夫（1997）：「延久2年北夷合戦と諸郡の建置」『東北アジア研究』第1号 東北アジア研究センター
- 井上 雅孝（1997）：「陰陽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 中橋 彰吾・下日 和寿（1998）：「片倉小十郎の城」白石城発掘調査報告書『白石市文化財調査報告書』第26集 白石市教育委員会
- 堀江 格（1998）：「宮代駆除」『福島市埋蔵文化財報告書』第112集 福島市教育委員会
- 伊藤 清郎（1998）：「3章・出羽の兵たちと莊園」『歴史6 山形県の歴史』山川出版社
- 大石 直正（1999）：「4章・奥羽・開東せめぎあい」『歴史4 宮城県の歴史』山川出版社
- 大矢 邦宣（1999）：『國史 みちのく古社伝記』河出書房新社
- 伊藤 博道（1999）：「大古町遺跡第一1次・2次調査概報」『丸森町文化財調査報告書』第16集 丸森町教育委員会
- 小川 淳一・高橋 繁子（2000）：「仙台市王ノ塙跡」『仙台市文化財調査報告書』第249集 仙台市教育委員会
- 伊藤 正人（2000）：「耳皿ノト」『中世土器の基礎研究』XV 日本中世土器研究会
- 大石 直正（2001）：「奥州藤原氏の時代」吉川弘文館
- 中野 俊雄（2001）：「日本中世の鉄の仏塔の形とその鑄造法」『鍛造工学』第73巻第1号
- 小林 清治（2001）：「石那坂金戦の時と所」「さぎのめ」第24号 福島市杉妻地区史跡保存会
- 羽柴 直人（2001）：「平泉遺跡群のクロロカわらけについて」『岩手考古学』第13号 岩手考古学会
- 及川 司（2001）：「都市・平泉一成立とその構成—12世紀前半期の平泉」
- 『日本考古学協会 2001年度盛岡大会研究発表資料集』日本考古学協会
- 八重樫忠郎（2001）：「都市・平泉一成立とその構成—東北における中世初期陶磁器の分布 北海道・東北地方出土古代末・中世 初期陶磁器集 成 宮城県」『日本考古学協会 2001年度盛岡大会研究発表資料集』日本考古学協会
- 大澤 伸啓（2001）：「都市・平泉一成立とその構成—庭園一平等院から永福寺—」
- 『日本考古学協会 2001年度盛岡大会研究発表資料集』日本考古学協会
- 梁川町教育委員会（2002）：「堂庭遺跡・梁川城跡（二の丸城）」『梁川町文化財調査報告書』第20集 梁川町教育委員会
- 入間田宣夫・本澤徹輔・編（2002）：「平泉の世界」『歴史研究叢書』3 高志書院
- 菅野 崇之（2003）：「陰陽の陶器生産」（2）飯坂遺跡「中世奥羽の土器・陶器」東北中世考古学会 高志書院
- 丸森町文化財保護委員会（2005）：「ふるさとの伝説」『丸森町の文化財』第27集 丸森町教育委員会
- 庄司吉之助・清治・豊田 宏 監修（2006）：「福島県の地名」『日本歴史地名大系7巻』平凡社
- 村田 晃一・白崎恵介（2006）：「中野高柳遺跡III」『宮城県文化財調査報告書』第201集 宮城県教育委員会
- 村田 一・保原 恒理・白崎 恵介（2006）：「中野高柳遺跡IV」『宮城県文化財調査報告書』第204集 宮城県教育委員会
- 徳澤 啓一・奥富 雅之（2006）：「新宿区落合遺跡（第13次調査）における土師器焼成構と製作残滓」
- 『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 大澤 伸啓（2007）：「東国の大津庭園」『日本庭園学会誌』第16号 平成17年度関西大会研究発表要旨
- 入間田宣夫（2007）：「平泉藤原氏と南奥武士団の成立」『歴春ふくしま文庫』53 歴史春秋出版
- 杉本 良（2007）：「奥六郡安倍氏の諸寺院」「紀要」第4号 北上市立埋蔵文化財センター
- 古川 一明（2007）：「IV 多賀城跡の11世紀・12世紀の土器について」「多賀城跡」宮城県多賀城跡調査研究所年報2006
- 日下 和寿・佐藤 敏幸（2008）：「市内遺跡発掘調査報告書III」『白石市文化財調査報告書』第31集 白石市教育委員会
- 菅原 祐夫・日下 和寿ほか（2009）：「八幡坂遺跡はか発掘調査報告書」『白石市文化財調査報告書』第34集 白石市教育委員会
- 日下 和寿ほか（2009）：「白石糸里町跡推定地はか発掘調査報告書」『白石市文化財調査報告書』第35集 白石市教育委員会
- 古川 一明（2010）：「第Ⅱ章 稲毛一 調査成果 2) 遺物」「多賀城跡 政序跡 補遺編」宮城県多賀城跡調査研究所
- 羽柴 直人（2010）：「東日本初期武家政権の考古学的研究—平泉勢力圏の位置付けを中心に—」
- 総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻博士論文
- 日下 和寿ほか（2011）：「山内遺跡発掘調査報告書6」『白石市文化財調査報告書』第41集 白石市教育委員会
- 篠瀬 稲一（2011）：「房總半島中部にみられる戦国期耳かわらけについて（予稿）」「千葉大学人文社会科学研究科プロジェクト」162
- 古川 一明（2013）：「宮城県地域における古代地方行政単位の形成過程について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179号
- 真山 一悟（2013）：「宮城の式内社」位置の検討—城櫻官街・交通路とのかかわり」「東北歴史博物館研究紀要」14
- 藏王町教育委員会（2014）：「指定文化財 指定保存樹木」「藏王町の文化財」

- 羽柴 直人 (2014) : 「北爪—もう一つの平泉」 岩手県立博物館テーマ展パンフレット 岩手県文化振興事業団
- 七海 雅人 (2014) : 「平泉藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究(その1)」『平泉文化研究年報』第14号 岩手県教育委員会
- 鈴木 雅 (2015) : 「田盆地の遺跡群I 前戸内遺跡」『蔵王町文化財調査報告書』第19集 蔵王町教育委員会
- 伊達市教育委員会 (2015) : 「平成26年度市内遺跡発掘調査報告書 江越遺跡」『伊達市埋蔵文化財発掘調査報告書』第23集
- 及川 真紀 (2015) : 「古代末以降の土器焼成窯」『第47回研究大会—東北の古代土器窯生産—』岩手考古学会
- 佐川 正敏 (2015) : 「城廻りと城櫓の時代 東北への仏教の伝来と寺院造営・瓦生産」『東北の古代史』3 吉川弘文館
- 伊藤 博幸 (2015) : 「日本国内における「平泉寺」について 一平泉寺地名と平泉寺—」『平泉文化研究年報』第15号 岩手県教育委員会
- 七海 雅人 (2015) : 「平泉藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究(その2)」『平泉文化研究年報』第15号 岩手県教育委員会
- 佐藤 健治 (2015) : 「平泉の光芒 清衡の草創」『東北の中世史』1 吉川弘文館
- 小川 弘和 (2015) : 「平泉の光芒 東アジア・列島のなかの平泉」『東北の中世史』1 吉川弘文館
- 八重樫忠郎 (2015) : 「平泉の光芒 コラム 阿津賀志山の二重堀」『東北の中世史』1 吉川弘文館
- 柳原 敏昭 (2015) : 「平泉の光芒 岐阜合戦」『東北の中世史』1 吉川弘文館
- 七海 雅人 (2015) : 「鎌倉幕府と東北 鎌倉幕府の滅亡と東北」『東北の中世史』2 吉川弘文館
- 三好 俊文 (2015) : 「鎌倉幕府と東北 鎌倉幕府の成立と東北」『東北の中世史』2 吉川弘文館
- 清水 亮 (2015) : 「鎌倉幕府と東北 東北の莊園と公領」『東北の中世史』2 吉川弘文館
- 七海 雅人 (2015) : 「鎌倉幕府と東北 御家人の動向と北条氏勢力の展開」『東北の中世史』2 吉川弘文館
- 八重樫忠郎 (2015) : 「北つわもの郡」新泉社
- 長岡 龍作 (2015) : 「資料編II 古代・中世 岩藏寺」『岩沼市史』第5巻 岩沼市史編纂委員会
- 水田 英明 (2015) : 「山羽国の大東道移管と陸奥接続使」『日本歴史』第811号 吉川弘文館
- 村田 見一・千葉 直樹・鈴木 朋子 (2016) : 「国史跡 三十三間堂官衙遺跡—平安時代の陸奥国日理郡衙跡発掘調査結果報告」『宜 理町文化財調査報告書』第19集 宜理町教育委員会
- 東北歴史博物館 (2016) : 「平成27年度宮城県地域文化遺産復興プロジェクト 第19集 宮城県文化財調査報告書」東北歴史博物館
- 入間田宣夫 (2016) : 「藤原秀衡」ミネルヴァ書房
- 橋口 知志 (2016) : 「前九年・後三年合戦と兵の時代 後三年合戦から平泉開府へ」『東北の古代史』5 吉川弘文館
- 保田 大介 (2016) : 「前九年・後三年合戦と兵の時代 安倍・清原氏と仏教」『東北の古代史』5 吉川弘文館
- 伊達市教育委員会 (2016) : 「梁川城跡32次調査概要」『梁川城跡-32次調査現地説明会資料』
- 八重樫忠郎 (2016a) : 「中世平泉の生活文化に関する考古学的研究」東北大学大学院文学研究科歴史科学専攻博士論文
- 坂村 均 (2016) : 「各遺構—括遺物の年代」「鎌倉かわらけの再検討」鎌倉かわらけ研究会
- 八重樫忠郎 (2016b) : 「平泉と鎌倉のかわらけ」「従前の鎌倉かわらけ編年について」「鎌倉かわらけの再検討」鎌倉かわらけ研究会
- 石川 安司 (2016) : 「12世紀後半の北武戲の手づくねかわらけ」「鎌倉かわらけの再検討」鎌倉かわらけ研究会
- 八重樫忠郎・高橋一樹・編 (2016) : 「中世武士と土器」2 高志書院
- 井上 雅孝 (2016) : 「陰男・出羽の土器」「中世武士と土器」2 高志書院
- 及川 真紀 (2016) : 「東北地方の土器焼成窯」「中世武士と土器」2 高志書院
- 菅谷 麟信 (2016) : 「平泉藤原氏と仏教」「岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集」第18号 岩手県立大学盛岡短期大学部
- 吉野 武 (2016) : 「多賀城創建木簡の再検討」「歴史」第126輯 東北史学会
- 日下 和寿 (2017) : 「白石市本郷遺跡」「第43回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」古代城柵官衙検討会



第10図 台ノ山遺跡の柱状高台と掘立柱建物跡（宮城県文化財調査報告書第62集より）



大高山神社の復元九輪塔



大高山神社九輪塔内の仏像

報告書抄録

ふりがな	おおはたいいせき						
書名	大畠遺跡 I						
副書名	都市計画道路「白石沖・中河原線」関連遺跡発掘調査報告書 I						
卷次							
シリーズ名	白石市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 54 集						
編著者名	日下 和寿・小川淳一						
編集機関	白石市教育委員会						
所在地	〒 989-0206 宮城県白石市寺宇屋敷前 25 番地 6				TEL:0224(22)1343		
発行年月日	西暦 2017 年 3 月 30 日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査原因
おおはたいいせき 大畠遺跡	しきいじしあざ 白石市字 どうはさま 堂場前 73	04206	02262	38° 0' 17"	140° 37' 42"	20000425～ 20000426	道路工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
大畠遺跡	生産跡	平安時代	かわらけ窯跡	手づくねかわらけ 大皿・小皿・耳皿		東北地方最南端の 12 世紀 の手づくねかわらけ窯跡	



1. 第1焼土遺構検出（東から）



2. 第1焼土遺構堆積土断面（東から）



3. 第1焼土遺構完成堀（南から）



4. 第1焼土遺構出土手づくねかわらけ

図版1 第1焼土遺構出土遺物1



1. 大皿 内面



2. 大皿 外面



3. 小皿 内面pvv



4. 小皿 外面



5. 大皿 (第6図1)



6. 小皿 (第6図8)



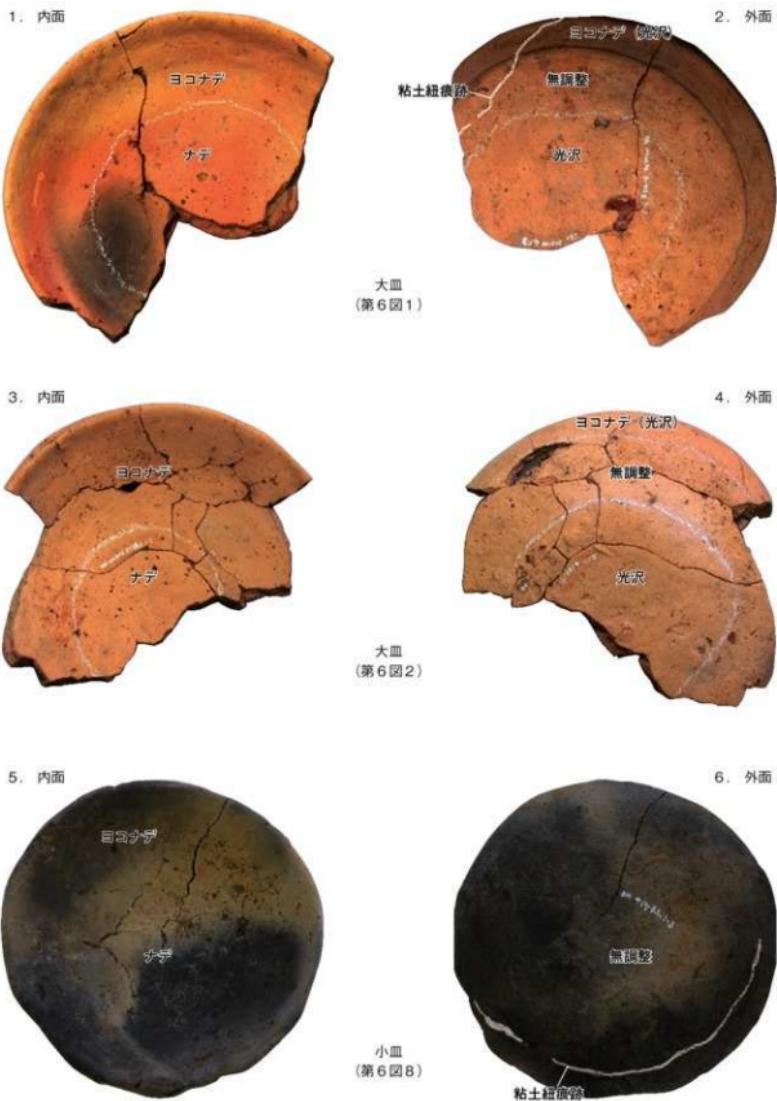
7. 耳皿 (内面)

8. 耳皿 (侧面1)

耳皿
(第6図7)

9. 耳皿 (侧面2)

图版2 第1焼土遺構出土遺物2



図版3 第1焼土遺構出土遺物3



1. 大皿の内面調整（内底面のナデ・内底面周縁から口縁部のヨコナデ）



2. 焼成時剥離土器片



3. 静止糸切り痕のような痕跡のある
粘土塊



4. スサ入り粘土塊



5. 耳皿 使用復元

図版4 第1焼土遺構出土遺物4

白石市文化財調査報告書 第54集

大 烟 遺 跡 I

—都市計画道路「白石沖・中河原線」関連遺跡—
発掘調査報告書 I

平成29年3月25日印刷

平成29年3月30日発行

編集・発行 白石市教育委員会

〒989-0206 白石市字寺屋敷前25番地6
生涯学習課 電話：0224(22)1343

印 刷 株式会社佐々木印刷所

〒983-0035 宮城県仙台市宮城野区日の出町2丁目2番16号
電話：022(236)1281
